

佐久考古通信

No 1

750925

佐久考古学会

一・(昭和50年度第1回佐久考古学会総会(予告))・一

下記のとおり昭和50年度佐久考古学会総会を開きますので、全会員の出席をお願いします。

記

1. 日 時 10月5日(日) 午後1時～
2. 会 場 佐久市岩村田浅間会館 大会議室
3. 日 程

- (1)開会のことば
- (2)会長あいさつ
- (3)専門局あいさつ
- (4)議長選出
- (5)経過報告
- (6)議 事

オ1号 幸賀の件
オ2号 昭和50年度事業計画(案)の件
オ3号 会費変更の件
オ4号 昭和50年度予算承認の件

- (7)内会のことば
- (8)記念講演

「佐久地域分布調査の成果について」

県文化財指導主事

丸山 敬一郎先生

――*親会開催について*――
総会終了後、旧交をあたためようと、会費千円にて、その場で懇親会を開くよう計画しました。多く御参加ください。

—佐久考古通信発刊にあたって—

佐久考古学会会長 由井茂也

此り度、従来の佐久考古の外に、佐久考古通信を発刊することになりました。なるべく回数を多くということで計画を進めていきます。

佐久考古通信は、何よりと会員の緊密な連絡、連帯を中心といたします。佐久という広い地域に分散する会員の連帯こそ、佐久考古学会の発展と成果に受けせりい大切な仕事だと思ひます。まとまった研究や調査報告は佐久考古に、この他の会員の日常生活事に経験した感想、手記等など、之に行なむものは多く載せておきます。そこで佐久考古通信にそれらをぜひ寄せていただき、1目で佐久の考古的動きや、各地のニュース、等などわかるような通信ができることを図らうとしています。

会員皆さんの協力と、創造力で独特な佐久考古通信にしていただきたいと思います。

佐久考古学会新役員紹介

顧 問	向 清	与良 清
会 長	由井 茂也	由井 茂也
副 会 長	黒岩 忠男, 藤沢 平治	黒岩 忠男, 藤沢 平治
事 務 局	木内 捷	木内 捷
委 員	井出 正蔵, 土屋長久, 青林幸男, 高橋敏 金子遵志, 佐藤敏, 新村薫, 武藤金, 三石近雄, 由井明, 土屋 忠芳	井出 正蔵, 土屋長久, 青林幸男, 高橋敏 金子遵志, 佐藤敏, 新村薫, 武藤金, 三石近雄, 由井明, 土屋 忠芳
監査委員	畠山 忠雄, 渡辺重義	畠山 忠雄, 渡辺重義

☆遺跡破壊の眼

武藤 金

今晩、信濃の鎌倉とまでいわれている、塙田平のア史探訪をしたとき、上田の国分寺跡の記念碑に、岩永蓮代さんの銘がある。そのことを思い出しました。

何年前のことだろう、平城宮跡に車庫建設の問題が起きたとき、一人街頭に立って、文化財保護を訴え五千名もの署名を集め、陰の力となったり、その後も、丹波國分尼寺、式蔵國分尼寺、播磨國分尼寺、伊賀國分寺などり保存した、たゞ一人抜け、地元の県、市教育委員会に訴え、あるいは新聞に開欄して世論を湧きさせ、保存運動をかけとなり、成功させるなど、孤軍奮闘している。

又上田國分尼寺の保存保護のため、一坪煙燐を提唱して地元の世論を湧き立てさせ、今日にいたらしめた事など、東京都並に住む岩永蓮代という一主婦の方。

それにつけても、国、県、市町村などの文化財保護行政の弱体と慢業不斷に歯がゆさを覚えるのは僕一人ではあるまい。

埋蔵文化財破壊の元凶は開発である。その多くが、国や地方自治体、公社公団などの公共施設の建設による。

開発と共に、て破壊されるものがほとんどであろうことは心に録記しておきたい。

☆土屋長次氏の詩を読んで。。。

高村 博文

私が、土屋さんに初めて会ったのは、ほぼ4年前の夏、和田村男女倉の差據の時である。土屋さんは、両肩をいからせ、手の力をめいてぶらりと取つてつけたみたいに下げさせながら活動的に歩いてくる姿は、といへん印象的であった。友人と話しをしている時、目はいつも1点にとどま
(3)

うことなく興味ありげにあちこちと動きまわ、といったことと思はだされる。

それ以来、同じ佐久平体身ということであって、佐久で発振があるをびひ、いつしょに生活をし指導していただいている。

そんなある日、私は土屋さんから公民館活動の一つとして創ったという詩を見せていただいたことがある。

ここに私がびっくりした詩の中の一編を紹介しよう。

座蒲団

土の上には床がある

床の上には畳がある

畳の上にあるのが座蒲団でその上にあらが、が葉とう
衆のうえにはなんにもないのであらうか
どうぞおしゃなさいとすすめられて
衆に坐ったゞべしによ

土の世界をはうかにみおうして、どううした
住み馴れぬ世界がごびしよ

私はこの詩を読んで奥にすなおなをして、たんたんとした句調の中からなんとも、いい知れぬしんかんとした、あじ

けなさ、むなしさ、さびしさを感じたと同時に土のあたたかさ、親しみが肌にふれたようと思える。

それは、土の工には一葉の上に……、の上にはと上へ上へと続く最初の三行の語句と樂という文字で表わした抽象的機密から、私にしゃちこはったしきたりとか、人間のつくった像々の規制を想像させ、そして上へめざしていることの反作用として、最後の五行の語句によって、遂に土のあたたかさ、親しみがじみでてきているような気がする。

土屋さんはすなおび、良いつけ思ひにつけ大人のする事をしらす、又非常に感受性が強く自分をごまかすことができないから、人に誤解されやすい。でも私はそんな土屋さんが大好きです。

最近、土屋さんのまわりにおめでたの語をチラホラとかわいが先輩、土屋さんに(南)多くかれ。

◇事ム局 だより◇

今日、佐久平においても文化財保護の問題が数々起っております。そんな時一人、一人ではどうこういたらううがでさず、多くの人たちの協力が必要です。又学問的水準においてより高良な見識と知識をかねそなえていなければなりません。そんなほかでたよりに今るのは研究団体の存在です、本会もいままでの歩みを振りかえり、種々の弱体をおさない、真に學問的研究団体としての役割りをはなすべく方向へ、1歩ひと歩歩むことをなければなりません、それには会長さんも述べられていらうように会員相互の緊密な連帯なしには考えられないことです。ここに佐久考古通信という、会員全員共同のらくがき板を設定し、会員皆参加の活動をかこしてゆきたいと思っております。どんな、ございなことでも、日常気がついしたこと、感動したこと、大い

に結構です。らくがきのつくりで投稿してください。
事務局長 木内 捷

▷新入会員紹介 ▷

小林 憲雄	983	仙台市東田小田原土手前 / 東北大學松風寮
小柳 義男	384-14	南佐久郡川上村竹山川上オヌ小学校
中山 悟	389-02	御代田町三谷 204号
花岡 弘	180	東京都武藏野市吉祥寺東町10の14
林 幸彦	181	東京都三鷹市牟礼6の10の9 高橋荘
福島 邦男	384-122	望月町望月坂下 両沢聖記堂

佐久考古通信 1号

発行所 佐久市大字岩村田3,338の1
佐久考古学会事務局

木内 捷

TEL (02676) 7-4443

発行者 由井茂也

編集 木内 捷, 高村博文

佐久考古通信

版面
76. 3. 1

佐久考古学会

- 一 昭和五十年度第一回佐久考古学会総会報告
- 二 → 佐久考古学会会則変更議案
- 三 第二号議案
- 四 第四号議案
- 五 佐久考古学会地区委員紹介
- 六 新入会員紹介
- 七 住所変更
- 八 事務局だより
- 九 会費納入のお願い
- 十 編集後記



昭和五十一年度第一回佐久考古学会総会報告

佐久考古学会 会則変更議案

本通報文一で御連絡した通り、昭和五十年度第一回総会は十月十五日、岩村田の浅間会館大会議室において二十二名の参加者をもつて開催されました。

開会のことば、会長、事務局のあいさつに引き続き、清場一致で武蔵院会長を宣辰に選出し幹事に入りました。

第三号議案である委員の件及び第三号議案（御社員の件）については、会則にふれるため括して会則変更議案として行なうことを決定し、第二号議案・第四号議案とともに別紙の通り清場一致で承認されました。

そして幹事会了後、閉会のあいさつが行なわれ、決定されたいた記念講演のため、はるばる豊野よりかけつけて下さった井文化財担当主任の丸山敏一郎先生による「佐久地域分布調査の成果について」の講演が行なわれました。県内一円の分布調査を実際の身をもつて研究されたら先生の実証的な科学理

論を基に佐久地域における遺跡のあり方を、

一、浅間山麓（小諸市、御代出町、雁井沢町周辺）二、平尾山周辺（佐久市東部）三、佐久盆地・田切り地形（佐久市を中心とした地域）四、立科山麓（川西地区）五、丘陵地帯（御社・原馬込）の大きく五つに分類し、各自の見解を述べられ、日暮佐久にとじこもっていた、我々会員にとって目を開かれる想ひのする素晴らしい講演でした。改めて本紙を借りて先生に厚く御礼申し上げる次第であります。

第一条

本会は「佐久考古学会」と称する。

第二条

本会は会員の佐久地方における考古学的・社会学的研究を相互に援助協力進展し合の貢献にその實體を目的とする。

第一項「本会は佐久地方における考古学的研究の興味を計るとともに、会員

相互の研究、会員の教職、文化者の研究を推進することを目的とする。」

本会の会員は、本会の目的に賛同する考古学者研究者によつて組織する。

一、会員登録し、新たに「本会の目的を達成するため次の事業を行つ。」

第三条

1. 総会（年一回以上）

2. 学習会

3. 講演会

4. 調査研究

5. 「佐久考古」「佐久考古通報」の発刊



(事務局)

第四条

6. 熊野文化財の保護
7. その他の必要なこと

第六条 本会は次の役員をおく。
1. 会長（二名）
2. 寄付及び補助金」

佐久地域を工場区（諏井沢町・新代田町・小諸市）と、望月町・高木町・八千穂村・小海町、北相木村・南相木村・南牧村・川上村に分けた地区（佐久地域外の地区）を加え6地区とし、各地区の会員から若干名代表者を選出し委員とする。

1. 総会（春季）
2. 例会（原則として第一土曜日）
3. 調査研究会
4. 見学会
5. 講習会

6. 会報「佐久考古」の発行
1. プラ会長（二名）――を「本会は次の役員をおく。

オ 会計監査員（二名）本会の会計監査を行う。

1. 会長（二名）
2. 寄付及び補助金」
3. 幹事（若干名）
4. 委員（若干名）
5. 会計監査員（二名）――を「本会は次の役員をおく。

オ 会計監査員（二名）本会の会員の任期は二年とする。但し再任はさまたげない。

- 第五条 本会の主旨に賛同し、会員を納入した者を会員とする。

- ウ 事務局（若干名）：事務局長一名と幹事若干名で構成し会員の執行を行う。

エ 事務局長（一名）：事務局長一名と幹事若干名で構成し会員の執行を行う。

- 本会の運営は会費と特別収入をもつてある会員は会費年額五百円を納入するものとする。――を削除し新たに「本会の運営の経費は次のように定める。

- オ 会計監査員（二名）本会の会員の任期は二年とする。但し再任はさまたげない。

エ 会員の選出は地区において行われる。又事務局幹事は事務局長が選ぶものとする。

- ア 個人会員 年額1000円
イ 団体会員 年額1000円

（ただし、中、高校生につれては、

- ウ 事務局幹事（若干名）：会計幹事、書記幹事等その他の必要を設立。

オ 会員の役員は会員にあたる。役員会の構成メンバーは、決算報告第一項のアイウエの役員をもつてある。

第八条 本会は顧問をおくことができる。

〔金〕 本会は民間をかくことが

できる。頭領は總会において推選す
る。

第九条 本会の會則の変更は總会において決
定する。

第十条、第十一条を新たに加える。
「本公司の目的に反する行為を行なつた
者は除去することがある。」

〔第十二条〕 その他の規則に必要な規定は別
て定める。」

佐久考古学芸慶弔規定

- 第一条 会員及び会員、貢献した方に慶弔事
が生じた際には、其の程度を適用する。
- 第二条 会員の死事には、お祝いを贈る。
- 第三条 会員の弔事には、香料を供する。
- 第四条 本会に貢献した会員に慶弔事が生じ
た際には、その程度を算出しで協議して決
定する。
- 第五条 本規定に対する説明に対するお尋
ねはいただかまるものとする。
- 第六条 本規定は昭和五十年十月五日より施行する。

第2号議案

昭和50年度事業計画

項目 月	行 事	発 場 調 査	学 署 会
10 月	総会会 (10.5)	下旬 佐久市 駒ヶ根郡山道跡	10月3日 講演 日本考古学協会員 丸山 勝一郎氏 第1回 入門講座 (ブレ) 林 幸彦氏
11 月		上旬 佐久市 駒ヶ根町山道跡	第2回 入門講座 (経文前) 育木 幸男氏 第3回 入門講座 (経文中) 麻沢 平治氏
12 月	忘年会		第4回 入門講座 (経文早) 福島 邦男氏 第5回 入門講座 (歴史その1) 高村 博文
1 月	新年会		1月1日 入門講座 (歴史その2) 白田 武正氏
2 月			2月7日 入門講座 (古墳) 佐藤 良久氏

(5) 佐久考古通信

昭和51年3月1日

3 月			第8回 入門講座 (歴史) 与良 晴氏 第9回 入門講座 保護について 木内 捷氏
4 月	総会		講演 萌生について 日本考古学協会員 鶴沢 浩氏

第4号議案

昭和50年度収支予算書(案)

収入の部

50000円 内訳 会費1,000円×50人=50,000円

支出の部

項目	金額	説明
謝金	10,000円	講師謝金 2回×5,000円=10,000円
会費	10,000	会場費・茶菓子代等
消耗品	15,000	紙 封筒 原紙 鉛筆 ボールペン等
備品	5,000	事務局印鑑等
通信費	10,000	切手 はがき 電話
予備費	0	
合計	50,000	

佐久考古学会

地区委員紹介

☆☆☆☆☆☆☆☆☆

新 入 会 員 紹 介

☆☆☆☆☆
(アイウエオ 順)

I 地区 (糸井沢町・勝代田町・小諸市)

金 井 重 志

II 地区 (北朝村・枝科村・立科町・望月町)

福 島 邦 男

III 地区 (佐久市)

佐 薩 敏 新 村 翼 武 藤 金

IV 地区 (白岳町・佐久町・八千穀村・小海町)

三 石 雄 蕉

V 地区 (北相木村・南相木村・南牧村・川上村)

土 庵 忠 芳・由 井 明

VI 地区 (その他地区)

日 田 武 正

今 井 正 雄 〒165 東京都中野区中野六ノ二二ノ八

大 増 広 行 〒236 神奈川県横浜市六浦町四〇七三

山 田 方

川 島 雅 人 〒356 埼玉県入間郡三芳町藤久保八一九二二二

寺 島 達 史 〒356 上山市上山博物館

前 原 雄 一 〒357 東京都杉並区井草二丁目二一三

丸 山 隆 一 部 〒357 東京都杉並区井草三丁目二〇八五

村 山 好 文 〒355 東京都中野区大和町二ノ一一八

ことぶき庄

小 葉 靖 〒385 佐久市岩村田福町三二四〇

(浅間中学生)

依 薩 修 〒385 佐久市岩村田相生町二二二〇

(浅間中学生)

提 隆 〒385 佐久市岩村田西本町二三一七

(浅間中学生)

中 沢 秀 幸 〒385 佐久市岩村田相生町一九三四

(浅間中学生)

住 所 爰 更

鳥 川 長 久 (旧庄上屋) 上田市中央西一ノ一〇二九

(昨年十一月三十日開店により改名されました。御両人の御幸福を至上をもって
お祈り申し上げます。)

青 木 幸 男 〒389-101 糸井沢町星野温泉ホテル

事務局だより

編集後記

（一）第一回入門講座の開催の予告
諸報のお情で延期となりておりました第一回入門講座を近日中に開きたいと思います。

講師に島川良久氏・林幸彦氏の両氏を予定しております。尚、会場等は追って御連絡致しまますので、会員のみなさんお詫び合せて御参加下さい。

期日は三月中旬に予定しております。
~~~~~

（二）会費納入のお願ひ  
第一回懇親会で承認されましたように、本年度からの会費は次の通りです。  
一般会員及び団体 1000円  
学生及び学生団体 500円

次号からは、すでに原稿が出来上り、間もなく発行の予定です。いずれも力作なにて御満足に譲ることと思っています。  
お楽しみに！

（三）

今年こそ、今年こそと思ひながら、一九七六年も正月を過ぎての発行となってしまいました。事務局の意図を深くお詫び申し上げます。幸い我母佐久のホーブ花園青年の活動力により織機も終りホット一息というところでした。

また、成2・成3のタイプを会員である島田さんに御苦労を戴いたことを感謝申上して御紹介申し上げると共に、厚く御礼申し上

（四）  
本会のスムーズな運営のため、会費納入に  
協力下さるようお願い致します。



佐久考古油價書2

発行所 佐久市入字岩村山5538の1

佐久考古学会事務局

木内 捷

TEL(02676)7-4443

発行者 由井 茂也

編集者 木内 捷 高村 博文

花岡 弘 最田 恵子

- 一 昭和五十年度第一回復興会報告
- 二 さぼろしの前方後円墳
- 三 佐久考古通信第 1 号を読んで
- 四 再び会員納入のお願い
- 五 土屋さんのこと
- 六 編集後記

佐久考古通信

第 3

1976, 4, 1  
佐久考古学会

## 昭和五十年度第一回役員会報告

第一回役員会は、二月二十一日午後一時半より岩村田の後園地区館に於いて、由井会長をはじめとして、十名の役員の出席をもつて行なわれました。会長さんのあいさつの後、木内事務局長の進行(司会)により議題に入り活発な意見が交わされました。協議事項及び協議内容は次のとおりです。

### 1. 貸資運営について

1. 貸資の領取方法について  
会員の納入状況がよくなかったことが事務局から発表され、その領取方法について話し合ひが行なわれました。その結果、イ 各地区ごとの会員未納者名簿を早急に事務局が作成する。  
ロ イで作成した名簿を地区役員に手渡し、地区委員が正式会員把握を兼ねて

より岩村田の後園地区館に於いて、由井会長をはじめとして、十名の役員の出席をもつて行なわれました。会長さんのあいさつの後、木内事務局長の進行(司会)により議題に入り活発な意見が交わされました。協議事項及び協議内容は次のとおりです。

### 2. 学習会、講演会、会員が読まる場発刊について

以上四項目の領取方法が決まりました。  
◎ 佐久考古編  
佐久考古編は、第一、二、三号は近日中に配布の準備ができており、第四号においても、ほほ原宿が決まりたという事務局からの説明があり、郵便局の窓口にて具体的な運営は事務局が立案することとなりました。

地区内会員一人一人に収取に当たる。  
「口座を開設し、各会員が会費をいつでも振りこむようになります。(特に)地区会員は佐久地域外の会員であり、ロの領取方法ができないため、口座を

し、通常の運営は、会員の意識から、できるだけ予算内でやりくりを行ない、数多く充実するよう努力することに決意しました。

### ◎ 「佐久考古」

「佐久考古」は、印刷費の値上がりなどにより、一回に最低十万円十五万円でも振りこむようになります。(特に)地区会員は佐久地域外の会員であり、金全く無く、とうての発刊の見通しがつかないといふことが事務局より発表され、どのようにしたらよいか話し合いました。その結果、まず資金を作るところが先決であり、そしてどのように貯め、会員の役員を増やす。  
以上四項目の領取方法が決まりました。その結果、まず資金を作るところが先決であり、そしてどのように貯め、会員の役員を増やす。  
「佐久考古」による発刊に際しては最低十万元十五万円の資金が必要であることが強調され、資金集めについては会員からの交付の問題が出来たため、總会に町の立地が良いということを述べたりました。

二、その他の

## ◎ 鹿串規定の件について

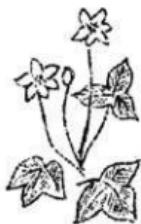
昨年十月五日の総会で決議された鹿串規定の適用範囲、鹿串にかかる費用を話し合ひ次のように決まりました。

・理事は会員が結婚した場合で、三千円のお祝いを現金で贈る。

・理事は会員が亡くなつた場合で、三千円の香料を供する。

筆者本役員会の若手のホーリーである花岡弘氏と佐々木豊子様にお願いした。

(事務局)



昨年夏の埋蔵文化財分布調査中の出来ごとである。

佐久市の分布調査（県教委と市教委共催により昭和四十五年度より実施）も、「よほど大轟になり、大穴、前山、岸野の山崎部（平塚は調査終了）」を残すのみとなり、五月より

続いた調査で調査員の疲労の色も隠せない長

年の六月二十六日、岸野付近の役員である高橋久保氏等の案内により、火の雨塚古墳、小

金平遺跡、中島遺跡等を踏査し、よい調

査員の樂しみの一つである昼食時にカリ、案

内役である高橋氏が「自分の持山である浦ノ

崎に一寸した塚が二つあり、昨年そこを掘りて炭焼きをしたら刀の破片が出て来て廠にあるので見て欲しい」との事で詳見することにな

った。

氏が大事に箱に納めてある鉄片をみて驚いたことに今まで見たことのない両刃のある鉄

## Z Z Z Z Z さほろしの前刀後円墳 Z Z Z Z Z

木内謙

片で、正しくそれは「剣」の破片で川敷ぎとなつた。

高橋氏による現場での立地、出土した状況等を聞きながら「前方後円墳ではないか」と

府を頼らせて研究者仲間に連絡をし、午後、現

地へ行く事となつた。

意氣揚々と集つた十名余りで、氏の案内により夫れ夫れ、劍、ナミ、殷等持券のうえ目

動車に分乗浜坂到着、早速車内に入つた。

県教委、丸山探査主任の担当により背丈の

信以上もある椎木の木を抜き舟ぐくなりた

がら、俺が一時間余りで行くべ、二つある墳

の全貌を表出した。

森の木（約六メートル）に登り墳形を見る者、メジャーや引張る者、その脇やかさは

以前後円墳であつたらとの期待で、暑さも吹き飛ぶほどの騒ぎであった。結果、碧空

を浴潤は毎日実施する事にし山を解り、先

(4)

はひてたし、めでたして私に花を咲かせて祝  
杯をあげるに及んだ。

七月三日、丸山清秀主導を先頭に朝より山  
に登り奥洞を開始するも、時間を見知る毎に、  
前方後円墳の期待は薄らぎ、苦がつくり、  
暑さに負ける者も出てくる仕事と相成り、兎  
も角、決闘を終了させ、最後の希望（実測圖  
を古墳研究の權威者に相討依頼する）を残し  
て下山した。

後日、県教委、丸山氏より連絡あり、実測  
図からは到底、前方後円墳にはならぬとの  
解答を受け、龍ノ峰一号、二号墳と命名、  
まほろしの前方後円墳となつた次第である。

いざれにしろ、「剣」の出土した確証ある

佐久市の古墳については、この瀬ノ峰古墳だ  
けで（中佐郡小字役にあるのは出土地不明）

佐久市坂古（六世紀中葉…：県教委、桐原指  
導室）の古墳を発見したことには間違ひな  
く、（今までには海野、火の雨等古墳が通説）  
数々の話題と驚異ある成果を残し、瀬ノ峰古  
墳から大きさよりも力をした次第である。

瀬ノ峰古墳は何時までも現在であれ。

木をあげるに及んだ。

七月三日、丸山清秀主導を先頭に朝より山  
に登り奥洞を開始するも、時間を見知る毎に、  
前方後円墳の期待は薄らぎ、苦がつくり、  
暑さに負ける者も出てくる仕事と相成り、兎  
も角、決闘を終了させ、最後の希望（実測圖  
を古墳研究の權威者に相討依頼する）を残し  
て下山した。

後日、県教委、丸山氏より連絡あり、実測  
図からは到底、前方後円墳にはならぬとの  
解答を受け、龍ノ峰一号、二号墳と命名、  
まほろしの前方後円墳となつた次第である。

いざれにしろ、「剣」の出土した確証ある

佐久市の古墳については、この瀬ノ峰古墳だ  
けで（中佐郡小字役にあるのは出土地不明）

佐久市坂古（六世紀中葉…：県教委、桐原指  
導室）の古墳を発見したことには間違ひな  
く、（今までには海野、火の雨等古墳が通説）  
数々の話題と驚異ある成果を残し、瀬ノ峰古  
墳から大きさよりも力をした次第である。

瀬ノ峰古墳は何時までも現在であれ。

## 佐久考古通信

### 161 を読んで

再び会賀納入り

お願い

佐久考古通信の発行、おめでとうござります。

まず、武蔵さんの「遺跡破壊の罪」を読ん  
での感想を述べたいと思います。

私は、「遺跡が破壊され遺跡保護を痛感し  
ながらも、結局は権力をもって遺跡が破壊さ  
れるのを見ていて、これが現状ではないか  
と思いまして。

それに比べて、東京都の若狭有るといつ  
婦人の行動は、なかなかできないこと。しかし  
が、しかし、私たちにできぬことはない。ただ  
あります。むしろ文化財保護は私たちに  
された後悔といつても過ぎではないでしょう。  
保護の気持を、いかにして行動に移すかだと  
思ひます。

最後に佐久考古通信編集部の想ぶん、佐久  
考古通信をますます充実したものにして下さ



先手でもう少し進んでしまったが、会費納入状  
況がどうなっているか、失礼では  
あります。御理解の上、御協力下さい。

尚、お手数ですが、口座を開設する予定で  
ますが、口座開設料は省略しておかれます。

## 土屋さんのこと

青木 幸男

土屋さんの詩に触るのは今回で二度目である。一度目は立科町の下屋敷遺跡で行なわれた尾掘調査の折、下屋敷遺跡に「春愁」という題で投稿されて下さった時、二度目は西までもなく、佐久考古通説の「湖田」であった。「つれも一つの着点に向って転回する如く、何か異様な光彩を放つてゐる」と思える。

その光彩が果して何を指すのかは、読まれた方がすでに読み取れてゐるがと思う。私は

本が多分一生のうちで、一番長い懐しから六

け、今もひきずっとながら生きているのは、こ

の中也との恩い出に由来するであらう。

小林は周知の如く中原中也の愛人を奪つた

人物であり、それがいわば甲虫の歴史的、自己の歴史を遙からず招来させたと見える段

である。小林は生前の中でも「湖田」、曲解し

きながら接していた部分は少々からずある。先

ほど小林の娘 桃枝に「どれも辛酸に變じ」と述

べたのは、死を契機にして始めて命まで死じ

あつた彼女の絆鄰つまり恋愛をほつきりとら

えたことがでたからであらう。詩人とはい

かにも胸解されやすい表層をもつてゐるので

ある。

考古学者見者としての土屋さん、考古研究家としての土屋さん、詩人としての土屋さん、

このすべてを通じて貫かれる一つの共通點と

もいりべき流れがある。

土屋さんは、詩人中原中也の追悼文の中で「詩

人を理解することは詩ではなく、生れながら

の詩人の肉体を理解することは何と辛い悲い

であろう」と記している。小林は「うまでも

なく、日本に於ける批評家の先駆としてその才をふるつてゐるが、その中でもとりわけ死

に關する追悼文はいづれも異様に美しかった。小

をとるものであつた。

## 緒 楽 後 記

（上）

（下）

もうすぐ、この佐久の山にも暖い春がやつて来るなどと想ひます。左党にとつては、「

無見絶から枕見病へ」といつたところです。

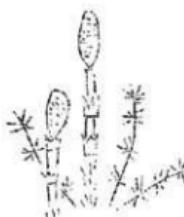
春は住所近の古い字典です。住所登場は

毎日お出で下さい。

お手筋も頑張らなくて宿泊の予定です。

（上）

（下）



佐久考古追憶篇 3

発行所：佐久市六字岩村田333号の1

佐久考古学会事務局 木内 捷

TEL(02676)7+4443

発行者：由井 茂也

著者：木内 捷 高村 博文

花岡 弘 島田 恵子

佐久考古通信

版 4

1976, 5, 1

佐久考古学会

- 一、上州路への紀行
- 二、妻探に想う
- 三、塙田城跡雑感
- 四、瀬戸の獅子舞の感
- 五、事務局だより



## 上州路への紀行

佐藤 敏

ん(柏谷土磨)のメンバーが集まっていた。

(計十名)

昭和五十一年三月三日佐久市教委社教の高村氏より、次のような電話があった。「明日」五分に内閣会館を三台の自家用車に分乗して群馬の出土品と比較対照をし鑑定をするので、都合によって八時半出発は出来ず、九時十五分に内閣会館を三台の自家用車に分乗して群馬へと赴いた。

車は平賀、内山を通り二五四号線を疾風の如く、ただ走りとして走り嶺園を山道も何の如きで、高崎山頂の坂を仰ぎ、高岡街「卓縫」を、お隣の群馬県立博物館へ行って、道、藤原の写真撮影等し群馬の出土品と比較対照をし鑑定をするので、群馬の出土品と比較対照をし鑑定をするので、都合はいかに」との電話を截った。丁度そんな時、少し風邪気味で頭痛を覚えていたが考えてみると、佐久地方では卓縫の既出物は、平根小などに展示されていて見見たことはあるが、発掘物として価値のある家地頭古墳の埴輪との比較対照であり、これを聞き頭痛も吹きとんでしまい、参加をお願いした訳である。

さて、ようやく当日四日朝八時三十分頃岩村山の茂間会館へ来て見ると、南の方から、三石さん、武藤さん、岩村山からは井上さん、森さん(定)さんと木内さん、宇生の林君、花岡君、市教委の高村君、御代田教委の島川さ

君より駒ヶ岳特有の迷り物の鮮やかさである神社を詔せました。

實神社は、一の宮として神社用語では、あり駒ヶ岳特有の迷り物の鮮やかさである神社の神主は平安時代から後醍醐時代にかけて、諸國の有力神社につなられた呼称。これには

時代により變遷があるが、いつどのような理由で定められたか、その由来については諸説があるが、朝廷または國司が指定したのではなく、その因において由緒深い神社、信仰の篤い神社に一種の序列ができる。その首領のものが一官とされて公認されるに至ったと考えられている。

さて、このあたりで対比に移ることにする。並膳る人々の目の輝き、何とも異様な顕々たる。時間一層に緊張して来る。対比結果は、報告書でということにして居路につくことにする。博物館を三時頃出発して高崎市の笠森館内に運びて来た。午前中は、二階に陳列してある群馬県出土の三色縫神獸鏡や埴輪、その他の出土文物などを見学して昼食となる。

これで昼休み一時を取り、近くにある群馬県の一の宮實神社參拜、延津主神・姫大神と宇摩御門に所在する。七一年の和銅四年三月の多胡郡創建の記念碑である。碑は碑身と笠石が残って居り、碑身高一、二六センチメートル、碑六〇センチメートル、笠石高一七センチメートル、軒轅九〇センチメートル、軒厚一五

センチメートルで唐尺を使用しており、軒幅が三尺で、その2倍が佛身高四尺二寸となる。

石材は吉井町南詣にある牛臘山の牛臘砂岩を西井町の吉井町南詣にある牛臘山の牛臘砂岩を各面にふくらみをもたせる様に加工してあって、吉井町の葉頭樂や多比良古墳の對石積室（見てもる）の石材と同質であり、同じ加工法といわれている。銘文は總字数八十字を六行に書き下してて彫りは深く、銘文は次のようになっている。

「井官符に上野國片岡の郡、綠の郡、甘貝

の郡、並びに三郡内の三百戸を郡と成し、羊に給して、多胡郡と成すとある。和銅四年（七一）三月九日中實の宜なり。た太（人）臣は正二位右上尊、右太（人）臣は正二位左上尊なり」

此の記事は「続日本書紀」の記事に相應して、都の建築、都司の任命、都の命名を本文として記載する。

取扱者の名前をつけて加えたもので建築者の文である。井官符とは、井官から出された官符でこの記事に関しても、太政官符が都の姫君は民部省、都司の任命は式部省から出されて、共に井官の取

扱いである。羊は人名で、上野國分寺跡から

この延喜式の文字互が多數出土しているところ、「吉井町」の記載によると、「給羊」は

莘（かみ）に付したことが推察される。「尊」

は奈良時代の読みと伝えられる。（中央公論

委員会編）

さて車に今乗し船路につくと、又富岡へ戻り、車は松井山を目標に走る早春の群木流り急坂を走りつつ、車は上野に出てる者の口説が

深く東北の人々は、「日の暮に雄水の山を越ゆる日は、青森のがねもさやに折らしつ」と

（万葉集）

「ひなぐもり離日の坂を越えしだに、妹が悲しく心えぬかも」万葉の歌を見ながら、

午後五時四十分無事出発点である我間会館へ到着した。

運転手さん御苦労様でした。

「今日は、だめだったなあ。」

「やっぱり、雨が降った後が一番いいなあ」

あれから、もう何年も過ぎ、九月にも我が家

づくつも建てられてしまった。

表紙は、古代人との対話だというようなこ

とを、「奈和」の小川さんが書いておられた

## 表採に想う

花岡 弘

今、降っている雪がとけて、暖かくなるとそろそろ表採の季節である。シーパンにズック靴とつたいでたら、雪の土を踏みしめながら歩くのは、何とも言えない気分である。

「オーケー、そこのはどうだい。」「あんまり、見えずら。」

小学生の時分、ひまをみつけでは友人のよ君と近くの丸山まで、土器を拾いに行つたのを思い出す。丁度、郷土の磨石住居址が発掘された頃である。その様の丸山は、一時間位で少ないとでも石（の）、三個は拾えたようになり、夕暮のそろそろ暗くなりかけた道を、

その日の戰利品を持って家に急ぐ。

「今日は、だめだったなあ。」

「やっぱり、雨が降った後が一番いいなあ」

あれから、もう何年も過ぎ、丸山にも家が



が、本当にそうだと思う。三月になつて、ひさができたら、又表探に出かけたいと思う今日このごろである。

## 塙田城跡雑感

青木幸男

「塙田城址の発掘調査に關して」何か書くようになると頼まれ、二つ返事で引き受けてしまふたものの、「さあととなるとなかなか面倒なものである。はじめから感想一辺倒であるのもうかと思ひ、ついでに、塙田城址に関する戦略的な説明を述べておこうと思ひ。以下先字説の論であるところの要約である。

塙田城址は塙田盆地を前方に展望する、独立した中央、標高約六百メートルを計る地点に位置する。城は、この山の傾斜面

を削平して築造され、東西二十数段よりなる整地面によつて、構成されている。今回の発掘対象地は、西端より数えて九段目に相当するテラスにあたり、テラス群内にあつては、

一等の面積規模をもつ。

城の歴史的変遷は、かなり複雑な様相を呈している。また、鎌倉時代の信濃守護所と伝えられる、塙田北条氏が用兵してくる点を

挙げなければならない。この塙田北条氏が報

貪暴陽と愈々共にして滅ぼした後、室町時代に至つて、村上氏の重臣猪沢氏がこれを才

覺と名した。天文二二年、武田信玄の信濃方略作戦により、落城するまで、実に二百年の長きに渡る戦城の歴史がもつて、落城を成す

せしめたる玄は、その後、猪沢氏の猪沢基

地として、七八、八年間廢の武将守候られたものである。はじめから感想一辺倒であるの

もどうかと思ひ、ついでに、塙田城址に関する記録が文にまみえてい。

このよう塙田城址とは、いわば鎌倉時代の大庄屋此の地、東側に居を構えたと

の記録が文にまみえてい。

から江戸時代の記録で、複合城址といふ

さて、塙田城址の発掘調査であるが、幸か不幸か、雨が降らずじまいの好天に恵まれ、一ヶ月有り、調査の終了をみたのは、夏の終りを告げ、セの声のたけなわであつた。セ

ミの鳴き声が塙田城だとすれば、さしつめ上

ノ城はコオロギの鳴き声に對比されようか。とにかく、私にとって初めての試みである城跡の調査は、日々の一々一日が、貴重な経験

の集積であった。これで、当初から計画された文献史学と考古学との相互扶助的操作より浮き出された結果とが重なるミーティング

で大きく由来しそう。私自身、本城址に関する予備知識といえど、僅か前記した種々ぐら

いのもので、果してどのような遺構がどのよ

うな状態で検出され得るのか、毎日見当のつかない筋締められたのを記録している。

たしかに「城跡」を想るということは、かかるもので、果してどのような遺構がどのよ

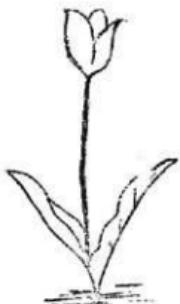
うな状態で検出され得るのか、毎日見当のつかない筋締められたのを記録している。

自分としてきた古墳調査とは、例えそれが通文や弥生時代の墓跡、斐伊は又、土師時代の遺跡であれば同裏、山跡の豊富さからくる即物的な気易さと、常新手段とする手口とに

よつて、場あたり的調査がなされてきたと云ふ。それ每の古跡調査から得た收穫は

と言えば、尊なる歴史の追加、補強でしかな

昭和1年5月1日



かつたよりを思ひし氣持さえする。それは、考古学のイロハともうべく地獄と本質とを最も冷感な態度で區別し得なかつたことに起因するだらう。今、仮に現象が死鬼より得られた遺稿や遺物を明示するなら、な實とは、遺稿、遺物の背後に傍び人情背景を暗示する物である。辞藻の雅緻は、省略と讀誦とを効果づけ、そして手に持るスコットは、失敗の許されない手初用のメスであらねばならない。私は、塙田城こりう一つの遺跡を以て、特徴を兩種とする調査の場合、「海の男」が生死を賭けて激闘に赴く」とちた真剣さを改めて学んだ思いがする。それは、一度頑張られた経験が、二度と元の形で戻ることのできない、絶対無二なるものであるから。

### 瀬戸の獅子舞い雜感

高村博文

昭和五十一年正月十四日(水)、瀬戸の街子供たち方で時計から見学する。ティコ、笛

の音をあわせてたゞらの獅子舞、各家一軒一軒

皆まほやしどうむせて尼弘へをし、家の

火祭とお出でなくとも折つてねり歩く。それ

の意では、此の用意してふるによつては、

御神をふるまつてもらひる。

七時半頃からであろうか、雷が降りはじめ

る。おふるまいにあづかつた酒を立ち飲むと

すつかり冷え切つていた空氣に脛にしみわたり、体の内部より熱氣が吹き出さる。

まいこと、生きている気分の同時に味わう。

又、瀬戸の部落内にある道術村の場所ご

とに、お飯箱(露天の茶屋のよき小屋)が四隅に、中央には火があつて煙をわかしている。煙をあげ、門の中からたえまなく漏れてくる音を見つめていると、まるで自然の波音に似た音が聞こえてくる。おはづけ、たくあんはくさい等のつけものと茶葉・甘茶の用意をしてあり、当番の奥さん達が訪れて来た人々にそれらをふるまつてくれる。甘茶(うじさい)の甘茶の木から取る。書は西洋の部屋内に栽培されていたが、現在は買つてくるそうである。私は、初めてのんだのであるがたいへんおいしく、皆さんにもぜひ一度、飲みに出かけるようお勧めする。私は、この所の道祖神にそれを五円のおさいせんをあげ、早くいい様子がみつかるようだと祈つてきた。お飯箱の大木の炎で涼々と焼らし出された瀬戸の乙女は、たゞへんかわいらしく、昔の若い女性のことを想像して、つい私も恋をしたくなつた。

### 專務局だより

山も一層に恩を吹きかえし、ほんの小さな芽  
の緑のをらめきにさえ比類されそりです。人々  
もホルモンの分泌が活発になる季節とか、  
男も女も皆んな生き生きとして、たくましく  
るいはされいどみえます。

佐久考古学會にもたくさんの方々会員が入  
会され、いよいよ盛り上ったすばらしい会に  
発展することと思います。三月三十一日に行  
なわれた年賀会も二十八名の参加者をもって  
開催され、林、島川両商店の祭券により寒賀  
しい年賀会でした。又、本会員で立地区委員  
をやつておられる福島邦男氏が四月十一日に  
吉沢茂子様と御結婚されました。きっと春節  
しい伴侶をぬとて、これからますます個活  
躍することと思われます。

「佐久考古通報」も原稿まで掲載すること  
ができました。決してもあるように本通報は  
会員みんなのらくがき版です。日常生活して  
いて気がついたこと、ちょっとメモったこと、  
みんなに知らせたいこと、何でも結構です、  
どしどしお届けまで投稿してください。

本通報は、まだ会員みんなで育てる段階でも  
あります。まだやつと土から筋を出した程度

の芽にすぎませんが、これからみんなで協力  
して天地に根をはる木に育てましょう。

( 5 )

## 佐久考古通報 4.

発行所：佐久市八字岩村出3.3.3.8.の1.

佐久考古学會事務局 木内 捷

TEL (02676) 7-4443

発行者：山井茂也

編集部：木内 捷 博村 高文

島田原子

- 一、年賀あいさつ
- 二、昭和五十一年度総会報告
- 三、昭和五十一年度第二回役員会報告
- 四、秋の味覚と繩文の頃を想う
- 五、事務局だより

# 佐久考古通信

編 5  
1977, 2, 1  
佐久考古学会



## 年賀あいさつ

会長由井茂也

これから残された期間、充実した計画の進行にあたるととにたつております。何かと上うしくお頼い致します。簡単ですがどういさつまで。

## 昭和五十一年度

## 総会報告

例のないような急難の中でみなさんお元気ですか。いつも物を言う時は必ずきまり文句で言ひ訳をいわなければならないような会から早く脱皮しなければならないと思いつながら、相も変わらずそういうことになってしまいましました。

六月の総会のあとは、夏の短い佐久の寒暖期です。多くの会員の環境からとの間の事業の停滞は止むを得ませんが、秋の大会や見学をストップさせたことは、ほんとうに申し訳ありません。その他、私個人の私事については御心配をかけたり、また大変お世話になりました。

また、佐久市坂沢の緊急発掘調査には会員のみさんの多数の御協力を得たことと思い、調査局などより承認されましたが、会員予算にますし、そこには現役で専攻されている学生達が大勢参加されていたので、実際の調査研究を通じ交流が行なわれ、本会の事業の空白を埋める大きな意義があつたことと思ひます。

考古遺跡の紙上をもつて会員の承認を得るという案でまとまりました。

そして講事終了後、閉会のあいさつが行なわれ、予定されていた記念講演「豆原祭における旧石器時代」東考古学者藤原司、森崎範蔵師により行なわれました。講演は森崎範蔵師独特な人を引きこんでしまった話し方と、ユニークな石器(道具)の見方を、わかりやすく説明していただき、とても有意義でした。

そして講演の後、近くの食堂において懇親会が催されました。開会のことば、会長あいさつに統き、満場一致で武蔵金員を議長に選出し議事に入りました。事務局より昭和五十年度会会簿、会計決算報告のあと、会計監査委員に統き、満場一致で武蔵金員を議長に選出し議事に入りました。事務局より昭和五十年度会会簿、会計決算報告のあと、会計監査報告がおこなわれ、承認されました。

## 昭和五十一年度

## 第二回役員会報告

第二回役員会は、一月二十九日、午後四時頃より若村田役員会館に於いて、由井会長をはじめとして十名の役員の出席をもつて行なわれた。

会長のあいさつの後、木内事務局長の進行について、会員の報告するようにといつ歴史が提出され、再審議するようにといつ歴史が提出されました。総会の場で充分討議の結果、この件については、会員の収入見込額が多すぎるため改めて審議するようにといつ歴史が提出されました。

会長のあいさつの後、木内事務局長の進行について、会員の報告するようにといつ歴史が提出されました。

されました。協賛事項及び協賛内容は次のとおりです。

一、昭和五十一年度佐久考古学会事業計画について

このことについては、総会において承認されたいた事業計画がいまだ一つもなされていないことの反省にたち2月と5月までつ事業計画を、承認されていた計画をもとに、再検討りをかし、抜一のよう決まりました。

二、昭和五十一年度、佐久考古学会計画について

このことについては、役員会で再検討され、佐久考古通信の紙上をもつて承認することが總会で決まつていきました。そこで本役員会で充分討議の次第、表2のように決まりましたので、本紙上をもつて承認させていただきます。

(事務局)

### 昭和五十一年度事業計画

表 1

| 月/項目 | 事業名                                                            |
|------|----------------------------------------------------------------|
| 2月   | ○ 第一回学習会(20日)<br>第一回縄文時代入門教室 藤沢平治氏<br>第一回遺物整理技術学習会 高村博文氏       |
|      | ○ 佐久考古通信第5の発行                                                  |
|      |                                                                |
| 3月   | ○ 第二回学習会(20日)<br>第二回縄文時代入門教室 一級認定現場見学 — 藤沢平治氏<br>○ 佐久考古通信第6の発行 |
|      |                                                                |
| 4月   | ○ 第三回学習会<br>第三回縄文時代入門教室 藤沢平治氏<br>○ 第三回役員会                      |
|      |                                                                |
| 5月   | ○ 佐久考古通信第7の発行<br>○ 昭和52年度総会                                    |
|      |                                                                |

## 昭和五十二年収入予算

表2

| 収入の部                                                                 |                                                                             |                                                              |                                                                           |                                                                                                                                                          |
|----------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 項目                                                                   | 金額                                                                          | 金額                                                           | 比                                                                         | 説明                                                                                                                                                       |
| 1 越金<br>2 会費<br>3 委託料<br>4 学会誌<br>5 寄附金<br>6 雑入                      | 28,160<br>65,500<br>0<br>35,000<br>0<br>340                                 | 0<br>50,000<br>0<br>0<br>0<br>0                              | 28,160<br>15,500<br>0<br>35,000<br>0<br>340                               | 前年度一般特別会計より<br>62人×1,000=62,000<br>(6人×500=3,000<br>1(団体)×500=500<br>学会誌売上<br>前年度一般特別会計より<br>62人×1,000=62,000<br>(6人×500=3,000<br>1(団体)×500=500<br>学会誌売上 |
| 合計                                                                   | 129,000                                                                     | 50,000                                                       | 79,000                                                                    |                                                                                                                                                          |
| 支出の部                                                                 |                                                                             |                                                              |                                                                           |                                                                                                                                                          |
| 項目                                                                   | 金額                                                                          | 金額                                                           | 比                                                                         | 説明                                                                                                                                                       |
| 1 賞賀費<br>2 交通費<br>3 旅費<br>4 需要費<br>5 役務費<br>6 備品費<br>7 事務局費<br>8 予備費 | 15,000<br>10,000<br>0<br>40,000<br>20,000<br>10,000<br>10,000<br>0<br>4,000 | 10,000<br>0<br>0<br>0<br>15,000<br>10,000<br>0<br>5,000<br>0 | 5,000<br>10,000<br>0<br>40,000<br>5,000<br>0<br>10,000<br>△5,000<br>4,000 | 講演会 講師謝金他<br>佐久考古通信の発行<br>文具他<br>会議賄等<br>郵送代等<br>車借上 行動費等                                                                                                |
| 合計                                                                   | 129,000                                                                     | 50,000                                                       | 79,000                                                                    |                                                                                                                                                          |

## 秋の味覚と魂文の喰を想う

三石 勝雄

秋とはさつても紅葉にはまだ早い彼岸前の日であつた。私は算取りに奥の山に行つてみた。日頃あまり人の通らない山路は草が生茂つて、草をかき分けなければ歩けない。

赤谷の部落を過ぎると谷はV字形をなし、山は陥しく、行く手を岩がばみ谷は陥ばまる。川は谷の底を流れ、ある時は岩の間に淀み、ある時は溝となつて落ち、谷間を灌流が流れて居る。

やがて雑木茂り、栗の古木立ちて原始林を思わせるようを中に入る。

谷の流れの音にまじつて小鳥のさえずりが聞こえてくるのみで、山は静寂そのものである。さきなり巣上でキヤーキヤーといり甲高い声におどろかされる。カケスである。カケスが二声三声鳴いて去つた後は又もとの静寂にもどる。

此の静かな山の中を歩いて居ると何時か読んだ事のあるこんな言葉を思い出した。「山

道は奥に進むにつれて木葉が深くなり、尋々何かが歩いた足跡がある。或は類の足跡であるかもしない。みずから、こらたどんの犬木の上の枝が内側に折られて木の上にたたかれて倒れて居る。

道は奥に進むにつれて木葉が深くなり、尋々何かが歩いた足跡がある。或は類の足跡であるかもしない。みずから、こらたどんの犬木の上の枝が内側に折られて木の上にたたかれて倒れて居る。

松は山に落ちて居たどんぐりの一つを拾つて、その皮をむいてかじつて見た。瓶や鳥が喰つて人間に喰えぬはずはないわけであるが、此はとても渋くて喰えたわけの物ぢやある。

この山の途中に岩陰があり、施文前期、中期、再生、土師、須恵器などの破片が採集さ

れて居る。

私は秋の山の味覚の思い出をたどつて見た。

秋の山の味覚は何と言つても算である。松算は勢にして原始に似たり」此の山の中は、そして此の静けさは原始の頃と變らないのではなかろうか。

道は奥に進むにつれて木葉が深くなり、尋々何かが歩いた足跡がある。或は類の足跡である。そしてそれそれの特徴がある。又栗実類では栗である。栗は今はクリタマバナの被寄を受けて、ほとんど結実しなくなつて居る。

今では栗拾いは一つの思い出でない。剣ゆびの爪に渾をこびりつかせてコリコリと生の栗を喰つた味。又開炉裏のほどの中でぶすつと銚子音を立てて栗の焼ける音など命ではただ一つの思ひ出である。又夜は家中で栗の皮をむきシラジでこしこしと機を取り、栗飯をしたものである。これは一つには米の足してしたのである。

私は山に落ちて居たどんぐりの一つを拾つて、その皮をむいてかじつて見た。瓶や鳥が喰つて人間に喰えぬはずはないわけであるが、此はとても渋くて喰えたわけの物ぢやある。

次に思ひじみ本の笑をあげて見る。

樹の天橋の笑については樹味曾、橋やきらなど、話は半奇から聞いた。しかし、この過方にはアタ爽きの法は伝つて居ない。供の頃の天橋の笑をくたき水に入れ渡わらのストローでよくと、ぶくぶくシャボン玉のようアワが出来た。これをとらばんぼくと書つてよく遊んだものである。

・どんぐり どんぐりは「しいだんば」と書  
つた。此れも食べる法に伝つてゐる。

・山ぶどう 酸味が強かつたが山の味覚の一

つであつた。

・ミツバ どう まつぶどうには母く熟する物

と赤い物がある。其に松のにおいがし、赤

い方は特に酸味が強く共に食用とも言ひれて

居る。

・ひらくち 所により「こか」とも言ひらし

い。此れは熟すれば甘くてうまい。然し多く

食べると言がれた。

此の外あけび、またたび（此の夷はあまり  
うまくない）やまなす、えび、こなし、山な  
しそう、此れ等が私の子供の頃山で食べ、  
そして遊んだ山の思い出である。

山にはやがて木の葉が落ち尽くし、街に水  
おわれるまで此れ等の葉が何つた。國交  
の頃の人たちも此れ等の物を食べ、又秋は味  
覚の秋であり、収穫の秋でもあつたのではな  
からうか。

私はこんな事を思ひながら山をくつた。

……板武延博より抜粋……

## 事務局だより

四号発行より八ヶ月を経たました。いつも

思いながらの連刊をお許し下さい。

今年こそ、今年こそと思いつながら祈らしい

己年を迎えたわけです。あの歴史時代（中略）

の土器に施された、世界七不思議の一つで

ある謎籠の文様にあやかり今年こそ素晴らし

き佐久考古学会に発展するよう祈念するもの

です。

新年早々に会費の納入状況を申し上げる事  
は既に恐縮に思いますが、十二日現在で約六  
十萬の納入状況です。我が学会発展のため速  
やかに納入されるようお願い申し上げ、益々

佐久考古学会が発展するよう会員の皆さんの  
御協力を切にお願いします。

ださい。

近年まれにみる、寒波の襲来で佐久の春も

まだ遅い感じがしますが、我等の胸中は暖

沢運動の調査を始め、保護せねばならない遺

跡が沢山あります。これからもますます一致  
団結し、遠い祖先が遺した文化遺産を守つて  
ゆきましょう！

(T・K)

佐久考古連携を久しうぶりでタイピングした  
日の夜の夢は、松沢遊跡で学会員の皆さんと  
発掘している夢でした。

起床して外を見ると、昨夜降ったのか一面  
の銀世界、春が待たれます。心は後沢遺跡発

掘調査へと飛んでいるのですが、春は名のみ  
の風の寒さ……が身にしみます。(K・S)

|                    |      |    |
|--------------------|------|----|
| 佐久考古学会事務局          | 木内 捷 | 彦子 |
| 発行所：佐久市大字岩村田1040の7 |      |    |
| TEL (02676) 6-0617 |      |    |
| 発行者：由井 茂也          | 幸恵   |    |
| 編集者：高村 博文 林 島 山    |      |    |
| 花岡 弘               |      |    |

# 佐久考古通信

No. 6

1977.3.20

佐久考古学会

- 一、信濃佐久平古氏族と古墳について
- 二、臼田の由来
- 三、考古学的視点、美術的視点
- 四、たわごと
- 五、跡部町田遺跡雑感
- 六、縁 感
- 七、事務局だより
- 八、編集後記



\*\*\*\*\* 信濃佐久平古氏族  
\*\*\*\*\* と古墳について

土屋長久

昨年、冊子をまとめたが、以下気づいたことを述べたい。

古墳の地域的研究については、難波榮一氏『諏訪地方古墳群の地域的研究』に示唆されるところが大きかった。

卒論で、佐久地方の古牧の成立と後醍醐古墳群を扱ったものの、当初、上田高校の郷土歴史、貢山氏の調査に併行し、諏井沢の、長倉牧場を追跡したこともあり、西筒氏の莊園事で、やや精緻さに欠けていたことを反省している。常に時間にも拘わらず、調査期間は、費用で漏れられ、次には緊急調査の結果ともうべきか、長日かかった遺跡も、あつと五分もたたず開発のために破壊されてしまうのであった。

やがて、国代田町役場に入り、佐久平の古墳のレポートと、分布一覧表、出土資料を再整理してみた。資料報告をのぞいて、考察に應ずるものはずべて、考え方や見方が、異なっていた。さらに、古墳ひとつを基礎資料と

表したレポートを主に、所蔵と文庫から再記述して、自分なり解釈し、第一回として古墳資料の集成にとりかかった。

昭和四十三年一四十七年度まで、県下各地

城の緊急調査の中で、多くの県考古学会員、先生、諸先生に接し得たが、当時、調査団編版が整わないといわれたのが佐久平であった。

歴史の時代は急テンポで進展し、佐久考古学会が今日の様に發展と努力が重なるのに及んだ。昭和四十五年度では、七誌のメモから

版成作成八〇枚に達し、まさに、卒論のみの仕事で、やや精緻さに欠けていたことを反省し

ている。常に時間にも拘わらず、調査期間は、費用で漏れられ、次には緊急調査の結果ともうべきか、長日かかった遺跡も、あつと五分もたたず開発のために破壊されてしまうのであった。

以上から、先づきの地域研究に至るには、方法論が確立しない限り大きな面に接した。

従つて、レポートの編成と至つたのが本書である。最終校正で、直せる範囲は改めたが

状況を示し、関東や、畿内の古墳と対照成非常に頗るいためだ。

一、古墳はその石室が開口していた。  
一、出土遺物も、その出土位置が判然としている。  
一、近世と近代、石室の石が他に利用されぬよう、ほとんど原形を留めていた。  
一、発掘調査に際しても、ほとんどが盗掘

によって、石室の石が他に利用されぬよう、ほとんど原形を留めていた。

一、古墳はその石室が開口していた。  
一、出土遺物も、その出土位置が判然としている。

一、近世と近代、石室の石が他に利用されぬよう、ほとんど原形を留めていた。

一、発掘調査に際しても、ほとんどが盗掘

によって、石室の石が他に利用されぬよう、ほとんど原形を留めていた。

一、古墳はその石室が開口していた。  
一、出土遺物も、その出土位置が判然としている。

一、近世と近代、石室の石が他に利用されぬよう、ほとんど原形を留めていた。

一、発掘調査に際しても、ほとんどが盗掘

によって、石室の石が他に利用されぬよう、ほとんど原形を留めていた。

一、古墳はその石室が開口していた。  
一、出土遺物も、その出土位置が判然としている。

一、近世と近代、石室の石が他に利用されぬよう、ほとんど原形を留めていた。

一、発掘調査に際しても、ほとんどが盗掘

によって、石室の石が他に利用されぬよう、ほとんど原形を留めていた。

一、古墳はその石室が開口していた。  
一、出土遺物も、その出土位置が判然としている。

一、近世と近代、石室の石が他に利用されぬよう、ほとんど原形を留めていた。

一、発掘調査に際しても、ほとんどが盗掘

によって、石室の石が他に利用されぬよう、ほとんど原形を留めていた。

一、古墳はその石室が開口していた。  
一、出土遺物も、その出土位置が判然としている。

一、近世と近代、石室の石が他に利用されぬよう、ほとんど原形を留めていた。

一、発掘調査に際しても、ほとんどが盗掘

によって、石室の石が他に利用されぬよう、ほとんど原形を留めていた。

一、古墳はその石室が開口していた。  
一、出土遺物も、その出土位置が判然としている。

題は、「佐久の古墳」であろうが、序文のことと東京の国学院大学、大場先生へ伺つた折、先生は藝術古墳と古氏族の活動についてふれられ、古墳の解明と結論からして、長い装選となつた。しかし、本文の末に「佐久平古氏族の性格とまつり」と題し、レポートをまとめたが、よく考えてみると、假説における佐久平の位置が、上村國、中甲斐國にも委しておらず、充分分析が必要であり、登載しなかつたが、次の板会で、原稿を再整理してみた。

出版についての費用とその発送範囲について、参考の為、記すと一千部印刷のうち、古費用二百六十万円。贈呈二〇〇部、保存二〇〇部、領布六〇〇部で行ったが、大部赤字となりたものの、今日、考古学ブームで、一番三千円の本で、五〇〇冊はハカルといふやうであった。

会員の皆様に今後共御協力をお願いします。

## 白田の由来

黒岩忠男

一説によると、白山川がその昔、美里の都

と云われていた頃、この辺に長門守正重という人が城を築いていたそうである。伝えるところによると後醍醐天皇の頃、小姓左中将好村といら人がこの地に流罪されていて、その城をお許しがあつて帰洛されたとき、正重が好村に仕えていた緣故から歸わつたのが此の城である。そこで、その後のある夜のこと、正重がやすやす寝てゐるところ枕頭に一人の老翁が現われて西うごとに、

「光り出す松の根もとに大石があり、その下の石臼の中に桶穂が三つ入れてある。土中に埋もれることが年久しく。お前が

来てこの石を取り石臼を掘りだしその上に窓を廻してよ。我々は駿河の三穗の明神と一体分身である。崇敬すればお前の子孫は彼の手の業のようになることを願ひながら

ん。」

と言ひ終るか終らぬうちに夢は覚めて消えてしまつた。そこでお告げのように、翌日、村の辰巳の方に行つて夢の下をみると集せるかな大石があつたのでこれぞとばかり、其の下をみると石臼の中に桶穂が三つ入つていたの

で、梓安不思議のお告げもあるものと、直ち

に駿河の三保から大明神を勧請して祀つたところによると後醍醐天皇の頃、小姓左中将好村といら人がこの地に流罪されていて、その城をお許しがあつて帰洛されたとき、正重が好村に仕えていた縁故から歸わつたのが此の城である。そこで、その後のある夜のこと、正重がやすやす寝てゐるところ枕頭に一人の老翁が現われて西うごとに、

さて、この伝説は、民俗資料の蒐集にあり思ひだして、五、六人の古老人に聞いてみたが

石臼のあった場所は、「白のもの」と云うところがあるかと云うことは知つてゐたが、伝説については知らなかつた。

## 考古学的視点

### 美術的視点

提  
隆

考古学ブームといわれる昨今、人々の眼が遺跡に開心をむける。これはとてもよいことである……しかし、そのほとんどの眼はいわゆる「宝探し」として発掘をとらえ、遺物は單なる美術品としか考えていないのではないか。つまり、井戸底の水炎形土器が優品で、たつたき、ひろつたばかりの土のこびりついた土器片はほんの価値もない。この考え方にはいつかは必ず「破壊」につながる考え方なのである。こういふ人たちには「一

片の土器片は何時かの歴史書より貴重である」ということを認識してもらいたい。しかし、こうした私も、ともすればそうなりがちなのである……。

したがつて、人々の歴史考古学にむけるか、美術いや、破壊にむけるかは、それからの努力したくてはたいだらうか……。

一片の土器片は何時かの歴史書より貴重なものである……。

## た わ ご と

武 座 金

「おばあちゃんは、毎日寒いのに、なにやりに行くだい。」「おばあさんか、おばあさんは、市の教育委員会に頼まれて、小宮山の後沢といふところへ発掘に行っているだい。」「発掘ってなんださ。」「発掘って、ほら、この間の新聞に出てたように、古の昔の人が住んでいたところを掘つて調べることだよ。せんだりではな、とても奇麗な模様や飾りのついた土器のか

「おれもみたひな。」「華くつてもま、おばあさんには、とてもいい勉強になるよ。龍文とか赤生とか美物にさわつてみたことは初めてだよ。おじさん達や、勉強に来ている大学生のお兄さん達もよく説明してくれるし、歴史のことも話をしてくれて家にいるよりも樂しいよ。和田岬から出る黒曜石でこしらえたヤジリや、そのかけらや、石の包丁も出でてくるからな。お前も休みには来てみる。」「矢の根や土器は学校で見たけれど、櫛のところへ行ってみたいだ。」「こないだの風の吹いた日は、とっても寒かったよ。たくさん岩れば伏がもたらないで、植え背景にしようとした人もあったよ。おばあさんは一晩風をついていたから……。」

「そんなに寒くともいくだかい。」「うん、大勢で仕事をしているから面白く

けらが出て、なんていつたつけな、縦形文とかいつたつけさ。六千年前の人が作つた橋文だとみんな喜んでいたぞ。市内では初めてで、めずらしいそらだ。」「

「おれもみたひな。」「華くつてもま、おばあさんには、とてもいい勉強になるよ。龍文とか赤生とか美物にさわつてみたことは初めてだよ。おじさん達や、勉強に来ている大学生のお兄さん達もよく説明してくれるし、歴史のことも話をしてくれて家にいるよりも樂しいよ。和田岬から出る黒曜石でこしらえたヤジリや、そのかけらや、石の包丁も出でてくるからな。お前も休みには来てみる。」「矢の根や土器は学校で見たけれど、櫛のところへ行ってみたいだ。」「こないだの風の吹いた日は、とっても寒かったよ。たくさん岩れば伏がもたらないで、植え背景にしようとした人もあったよ。おばあさんは一晩風をついていたから……。」

「それじゃ駄目だ。僕達には見られないに。」「仕方がないそうだ。市では市会を造つたり、学校を建てたりしてお金がなくて陳列する所や、しまっておくところが建てられないだよ……。」「おばあさんが仕事をしているところへ西尾さんも見に来るかい。」「十月の初めから挖掘しているが、今ま会つたことはない。市の係りや開発公社では5つも見にくるが……。」

3月20日

## 跡部町田遺跡発感

森村博文

信州の冬の煙りごとつ一貫赤にわこした炭  
を灰の中にまきわけながら入れ、センペイぶ  
とんをかけ、こたつの中に暖までとつぶりと  
つかつてついだたねをしたーそんな子供の  
頃の思い出があふと、うかぶものといわれた  
ら、そんなことをきっと心の中で思うような  
情気がする。

通 寒風はまるで、ほほをカミソリで切ったよ  
古りな病気を、そして生きていることの実感を  
お送りてくれる。それは決して暖房のきいた部  
屋の内では味わえない、赤々と燃える火の暖  
さを、ゆらゆら立ち昇る水蒸氣に染みが湧  
き、人々が詰まつて肌と肌を寄せあい、今まで  
またたく間にさえ寝覚めを忘えさせてくれる。  
土、日曜ごとに息をせき切つて自転車でか  
つけてくる中学生の中にも赤々と燃え  
る火がある。七十才近くになつたおじさん達  
もびらつた。

5 ) 昨年十月より、浮舟学舎に入会してから私  
はとつては初の長期的な実習(後藤遺跡)に  
参加する機会に恵まれた。  
体力がない上に、土運びやエコツブをにぎ  
つたことなどまるで経験したことのなかつた  
私は毎日毎日が非常によく「しんどい」作業で  
あつた。草刈りからはじめ、毎日毎日土  
通びだけの日が一ヶ月も続いた時は、「なん  
のためにこんな苦労をしなければならないの  
だろう?」と考え込んでしまつたこともたび  
たびあつた。



馬田惠子



しかし、そんな寒氣地のない私にとって、  
名古屋会員諸先輩の、発掘に対する情熱と謹  
慎を想起、人間的であたたかさ、日々の被  
られ合の中で樂して、こんな私でも、迷惑を  
かけながらも健先輩の後に続いてやれるもの  
なら、なんとか最後までやりぬきたいと考え  
るようになつた。

十一月のある日、三石さんと出井さんの指  
導を受けて三人でプランを練つた。この日初  
めて発掘に対する深い興味を味い、とば特  
に一ヶ月以上の勤労と、林主任の指導によ  
つて受けた知識を、私なりのリポートにまと  
めることができた。末筆讀み合には、毎  
日毎日が新しい発見であり、新しい知識を吸  
收する機会である。しかし、一ヶ月のうち半  
分だけしかなかでできない自分の仕事の大きさ  
は、何がゆいばかりである。

発掘から離れていた現在、今も人々に折り  
にぶれ、埋蔵文化財保護の重要性を認識する  
のであるが、その満足感と考え方の相違に  
体どん方法で多くの人々に理解を待つゆけ  
はよいのだろう。結局今までしてきたことは

(6) がしてならない。しかし、そんな思いの中から得た結論は、私自身がもともと推進文化財に対する知識を半ば、その中から得たものを感じて、保護の大切さを訴えてゆく方向を見出すべきではないだろうか? ということがあります。

## 事務局だより

### 第一回字習会開かれます

先に通知したとおり、第一回字習会が二月二十日、岩村山漫遊会館にて由井会長をはじめ会員十五名の参加者たち、午前十時より開かれました。午前中は、高村氏による造物美術圖作製作業を行ない、話しが長すぎて、実際には美術作業をする時間が少なかったことはたしかにありました。今日は形を正確に作図することは主眼に行なつたが、自分で何かを一生懸命やっている人々の顔は、はづらつとして楽しんだ。

午後は、藤沢先生による縄文時代の土器の手習会が行なわれ、意図どおり、現在復元されておりました。

形分類方法等説明を行ない、多少難解な所もありましたが、縄文時代の創始期から前期まで日本の視野に立ち概説を行なつた。最後に由井会長が特選した縄文式土器の写真と、後沢ころ、次回はぜひ会員が持つていてる縄文式土器を実際に見ながら字習会をして下さいました。

今年度はじめての字習会でしたが、自分達が活動を始めた事がやつて来ました。佐久考古学部も機関紙も展開を活動を開始しております。大きな問題を、(KS)

### 編集後記

#### □ 佐久考古通報担当幹事紹介

今まで、佐久考古通報を発刊してきましたが、この間幹事を務めた方々を紹介します。

佐久考古通報編集幹事紹介

昭和 52 年 5 月 25 日

- 一 美田地畠古墳と城手刀  
 二 洞源山貞祥寺の三重塔婆  
 三 前山の歴史  
 四 事務局だより  
 五 編集後記

佐久考古通信

版 7

1977, 5, 25

佐久考古学会



あやめ

## 英田地畠古墳と歴手刀

黒 岩 忠 男

英田地畠古墳は新海三社神社の旧境内に当る所にあり、現場は墳丘もなく一見普通の畠地で、地籍は白山町大字田切口字英田地畠である。

千瀬神社は古くから佐久地方の郷社と称され、神宮寺も併存していたし、いまも地名に東坊、西坊と言われている所があり、その西坊と呼ばれている所が英田地畠古墳のある所である。

昭和四十年一月、畠の所有者鶴見達氏（旧制鉄浜中子の同族）が、畠を薬用人奉畠にするため、地下一メートルほど天井返しをしていたところ、たまたま先が金物らしいものに当ったので、掘り出してみると刀二振が出土した。更に附近を振り越げると、土器数片と鉄器、人骨らしいものも出てきたといふ連絡があつた。

行つて見ると、刀は裁手刀と直刀、土器片は須恵器と土器器の破片、鉄器は鉄鎌の破片

であり、又人骨の房木化したものに木炭がついていた。更に現地まで行つて調べてみると、

石碑の西側寄りに粉末化した人骨が細長く横たわり、その下に木炭が砂礫の上に薄く敷かれていたので古墳石室の基部であることを確認し、四十年三月末清掃発掘の運びとなつた。

古墳は石室の基部のみで、積石等は全く破壊されており、蓋石などのような大きな石は何處かへ運び去られて無く、附近的の石燈などを探して見たがそれらしいものはなかつた。

狹道も押しつぶされて変形し狭くなつてゐた。古墳の傍造規模は、はつきりわからないが

全体から見て、横穴式石室をもつ小規模な円墳と思われる。玄室内部はおよそ煙形で東西約一メートル、南北約二メートル、狹道は南北

に歩いていた。床面には砂礫が薄く敷いてあり、その上に同様に薄く木炭が散かれ、人体

は西壁寄りに南北に細長く伸びていたが、詳しい埋葬の形はわからぬ。

歴手刀は刀身全長四八厘米、柄の基部孔の上

に奇剛の菊の彫刻が装飾として付いていたが、根元に作られたいた。柄と身は共作りである。

全体に腐朽が非常に強かつた。

尚、田切口から大奈良にかけて平地の畠一帯には、大半破壊されたが俗称十二塚・四十塚等の古墳群があり、

割拠古墳群・季ノ神古坟群・外丸間古墳群等がそれである。英田地畠古墳は新海神社境内の古墳群の一つとしての一古墳であり、

英田地畠にはまだだいくつかの古墳が存在したのではなかろうか。その後英田地畠籍の新海神社寄りの畠から、直刀一振と須恵器の破片が発見されたことも耳にした。

**洞源山貞祥寺の二重塔婆**

明治三年四月十八日三重塔は前山の貞祥寺に在つたもので、明治初年の持仏分離令、拆仏禁令により、持光寺は廢寺となり、

洞源山貞祥寺の二重塔婆は西壁寄りに南北に細長く伸びていたが、詳しい埋葬の形はわからぬ。

明治三年四月十八日三重塔は前山の貞祥寺に

先り述べた現在の地に移築されたもので、再建二十一年目。

神光寺には古くから、源賴朝の寄進による

といふ伝説がある。が、

文政十二年（一八二九）松原村全焼といふ災

禍にあい焼失。

神光寺別当が三重塔の再建を計画して、名匠の名高い野沢村の宮大工、小林源蔵昌長（三代目）を棟梁として工事を始めたが、上棟を目前にして、弘化二年四月四日、工事小屋から出火、三重塔の切組物を残らず焼失し

てしまつた。

弘化四年に再び再建計画ができて、また小

林源蔵にまかされた。失火の責任を以て小

林源蔵は、こんどは、長男の小林市太郎

久を棟梁に推し、妻子にだした二男店長、三男

佐勝長もよびよせ自分はその後見人となり、娘

子こぞつて再建にあつた。（小林市太郎昭

長十九歳四代目）議定書によると、

野沢大工棟梁 小林市太郎

小諸水大工棟梁 立川亮之助

野沢水大工棟梁 高見沢賢成  
野沢水大工後見 小林源蔵

外に中小田切村清水票兵衛も藤原家として

参加したといわれる。

袖方慎業

種子村井出榮助

三根算師

小諸善田中平作

鍛物師

入沢村山形孫千治

岩付正信大工伝左衛門

小林源蔵は、著工半で消失したことを思い

金拾両を神光寺に寄進した。

延喜二年（一八四八）八月十七日に完成、

着工以来三年目。

請負金櫃金六拾両と扶持米六拾俵

（著者注）前山の歴史

消防部に通ずることができる。

原始時代ここに住んだ人々は、片貝川で魚をとり貝をあさり、背後の台地や山麓では獸を狩り、果や穀などの木の実や山菜を採つて自然の恵みを豊富に受けて生活したものと考えられる。

前山地区では、まだ、旧石器や縄文土器の時代の遺物は発見されていないが、今歲、前山折付近から標高一二〇〇メートル内外に及ぶ科山麓に於て、その発見が期待される。

科山麓に於て、その発見が期待される。

（著者注）前山の歴史

昭和52年5月25日

加曾利式土器が出土している。

弥生時代に入ると、前山地区の出土遺物の豊富さには、目を見はらさせられるものがある。これは片貝川流域の湧水の豊富な底泥地が、原始的水稟栽培に最も好適な条件をもつていたからと考えられる。小宮山の板瓦・諱訪神社境内、前山の竪下、下村の大門下、二塚等には弥生式後期の箱清水式土器が大量に出土している。特に現在発掘調査の行なわれている板瓦は箱清水式の標準遺跡とされ、

大瓶の箱清水式土器と太形哈刃石斧等を出土

している。また大門下からは箱清水式かめ、檍目文朱塗、無文朱塗土器を出土している。漁獲下と十二塚からは石包丁が発見されている。後期のものは古墳文化時代の遺物としては、前期のものは六門下から小形鉢、こしき、培等が発見されている。後期のものは、やはり大門下から高台付鉢、滑石製筋鉢、鐵劍、鐵刃片、須など。

恵器の鏡、皿、坪が、後次からは土器と櫛器の破片が発見されている。なお下村（台地）からは勾玉が出ている。また、片貝川対岸の桜井、三塚、泉小学校敷地から湖原湖の東方付近に至る地域にも土師器、須恵器の出

土地が多い。

古墳群は以外に少なくて、大堀一・小宮山の地の限に三基で、いずれも横穴式である。

六・七世纪ごろには、片貝川下流域の播磨はかなり発達して、人口も増加したものと思われる。大和朝廷がこの地域に県を設定したこととは、いま岸野地区に下県の地名が残っていることからみて推定することができる。いま下県から前山付近の片貝川下流域の米作地帯に大和朝廷の県が置かれたものであろう。

大化の改新によつて、國、都、里制が布かれ、里はさらになびと改称された。一郷五十戸

が原則とされ、水田は余里に区画され、班山が原則とされることはできないが、小宮山に、朱里制の測量の起点といわれる「地の限」とい

う地名が残つてゐることは見逃すことができない。

平安時代の中嘆寄かれた和名類纂書に、佐平安時代の中嘆寄かれた和名類纂書に、佐

久郡には七郷が配されていて、そのうち岸久郡には七郷が配されていて、そのうち岸

水田地帯のどこかにあつたはずである。

大伴氏は羽柴郡を中心として、片貝川の流域に沿つて、さらに開拓をすめていたものと思われる。現在小宮山に残る「伴野」の字名は、こうした大伴氏との関係を示す地名であり、大伴氏が祀つた式内大伴神社もこの

延喜式内に大伴神社があることなどによって推察できる。

法山古墳のある松本半から東條地方にのび、上小地方をへて、さらに佐久郡に入つてきたことが、日本書紀の小祭御陵の里（和名抄の夷女郷）の大伴連忍勝の説話や、また佐久郡の延喜式内に大伴神社があることなどによつて推察できる。

の皇后忍坂大中姫のためにその御名代忌として、當時、その地方の米作の中心地に設定されたものと考えられる。

七・八世纪ごろには、大伴氏の勢力が、弘法山古墳のある松本半から東條地方にのび、上小地方をへて、さらに佐久郡に入つてきたことが、日本書紀の小祭御陵の里（和名抄の夷女郷）の大伴連忍勝の説話や、また佐久郡の延喜式内に大伴神社があることなどによつて推察できる。

大伴氏は羽柴郡を中心として、片貝川の流域に沿つて、さらに開拓をすめていたものと思われる。現在小宮山に残る「伴野」の字名は、こうした大伴氏との関係を示す地名であり、大伴氏が祀つた式内大伴神社もこの延喜式内に大伴神社があることなどによつて推察できる。

吾妻鏡の文治二年（一一六九年）十月二十一日条に「伴野庄地頭加々美二郎長吉云々

とあるから、佐久郡伴野庄の地頭職は平家

討滅の戰功によりて甲斐源氏の小笠原長治に与えられたことがわかる。長治は伴野庄の地頭職を子の六郎時長に与え、以後、小笠原六

郎時長の子孫が伴野氏を称して、この地の豪族としてその勢いを擴らうことになる。

しかし、この小笠原氏の土着する以前に次和のことに注目して置かれた。栗岩英治氏の「信濃源流の研究」によれば、平安時代の末ころ院徳であつた源義詮佐久郡蘿山荘に下司として下向してきた蘿原氏の末流が、蘿山館に住んで蘿山氏を称したことが記されている。

蘿山は小宮山である。周囲に山をめぐらしこそ地形から蘿山と名づけられたものであろう。

彼等は小河山を発祥の地として小河山氏を久称したものと考えられる。(この蘿原氏系の

古の小宮山氏のほかに、後に入ってきた源時氏系の水路の導入ができるようになり、野沢平全城

の水を引いた。これらの用水は、今日の八ヶ川等へと水害化がすみ、伴野小笠原氏も

地頭の活潑の様には千曲川から導いた用水の水を入れた。これらの用水は、今日の八ヶ

川のものとみなすものであろう。宿舎の周囲には市庭をつくり、物資の集散が行なわれた。

(小宮山にはまた、小笠原長清の父、信義守加々美源光がここに居住したといふ伝承がある。しかし、源光も長治も彼等は源賴朝の信

任の厚い謀貢幕府の重臣であつて、甲斐國中

巨摩郡加賀美、小笠原の地を本拠とし、また

鎌倉や京都にも居館を構えているので、恐らく彼等自身が伴野庄に居住したことではなく、家臣の日代を派遣していたものと考えられる。

この日代の役所が小宮山に置かれ、その結果遅光居仕の伝承も生まれたものと思われる。

これらのことを考え合せると、平安末期か

ら鎌倉時代のはじめにかけての伴野庄の中心は小宮山に置かれていたとみてよいであろう。

いま野次に伴野氏館址が史跡として残され

ているが、この跡地に新たに居館を構えて居たのは、長治の子の六郎時長であると考

えられる。鎌倉時代に入ると、千曲川からの

水路の導入ができるようになり、野沢平全城

にわたって水害化がすみ、伴野小笠原氏も

地頭の活潑の様には千曲川から導いた用水の水を入れた。これらの用水は、今日の八ヶ

川のものとみなすものであろう。宿舎の周囲には市庭をつくり、物資の集散が行なわれた。

これが一遍上人巻(京都市立書院光寺蔵)一遍

上人總詞(第二卷(金台寺藏))に記されているが、これは時長の子、時重の代である。

長治の子、六郎時長即ち伴野氏初代は、吾妻鏡に二十数回にわたってその名が見え、將軍の隨兵や幕府公の際に於ける流鏑馬等の

射手を勤めるなど典型的な鎌倉武士の一人であつた。彼は恐らく伴野庄の守護館に居住するよりも、鎌倉に居住することの方が多かつただろと思われる。彼は悲運の將軍源頼家の

側近であつた長兄小笠原良經が、頼家の失脚に連座して北条氏に疎外される等のことがあつたためか、伴野庄の地頭職と共に小笠原

倉庫をも、伴野小笠原氏の勢いは甚ださかんであつたのであるが、時重の子、伴野長泰のとき弘安三年(一二八五年)十一月、鎌倉幕府の重臣、安達泰盛の乱(鎌月騒動)に

逃走して、父子五人が謀殺され、伴野氏は幾度的か打撃をうけて衰えてしまった。



## 勝 扇 向 だ よ り

佐久考古学研究会発行

佐久考古学研究会発行

うな施文具を用い、どのような方法で施文されたのかを、油粘土を使用して実験に行ないたいと思つております。

( 日・月 )

ながら手書きました。

油粘土の上に、さんのへんでもない一本の縁をこらがして、手にもつた施文土器とまつたく同様な文様がうかびあがつてきました時

第一回 手書き会開かれ

先に述べたとおり、第二回字書会が三月二十日、午前、後沢遺跡の現場で、午後、野沢金鉱にて約二十名の参加者をもつて開催されました。

後沢遺跡の現地から野沢金鉱へといそがれて移動したとき、手書き会は、おもむろに東信で初めて見えた方形周溝墓の掘り下げ作業が開始された時であり、参加した人々にとってたのへん貴重な体験となりました。

午後は、場所を改め会場に移動し、奉祝講師による埋立式土器の教説についての字書を行ないました。

初めて、西文紙の作り方、竹背文の種類等の理屈の字書を行ない、予測知識である程度得たところで、奥岩田会長の挨拶してから原住の日本（たのへんよくできておりほん）の意味が、どのよを資料を参考にして、土器の文様が、どのよ

ば、何ともえらい心動き覚えました。後沢遺跡の現地から野沢金鉱へといそがれて有意味な一日でした。

下さる。

手持の原稿がありましらどしどしお寄せ文でまとまりました。

好天氣がつづいて後沢遺跡調査の現場では出来上りました。今回は調査を中心とした論文でまとまりました。

若古遺跡もいそがしい作業の合間をぬつて活用して頂けるよう、編集子一同、頑張りました。

## 編集後記

佐久考古学研究会

通信版 7 をお届け致します。

毎度の事ながら、今回も予定より遅れました事、深くお詫び致します。

このまにか、花の花も咲り、ここ佐久の春も既に人づつたようです。

佐久考古学研究会から、すこし今度アーチ、当面

佐久考古通研版 7  
発行所 佐久市大字岩村田 3338~1  
佐久考古学会事務局 木内 捷 弘  
TEL (02676) 7 4443  
発行者 由井 康也  
編集者 林 幸彦・花岡 峰  
島山 恵子

# 佐久考古大會

No. 8

1977, 8, 25

佐久考古学会

- 一 昭和五十二年度佐久考古學會總會について（予告）
- 二 昭和五十一年度佐久考古學會會務報告
- 三 昭和五十一年度會計決算報告
- 四 昭和五十二年夏事業計劃（案）
- 五 昭和五十二年度會計予算（案）



## 昭和52年度佐久考古学会総会について（予告）

佐久市佐久市役所内会議室

1, 日 時 昭和52年9月10日(土)午後2時～

2, 会 場 佐久市野沢会館洋間2号

3, 日 程 PM 2:00～

- 1) 開会のことば
- 2) 会長あいさつ
- 3) 日程説明
- 4) 議長選出
- 5) 議事

第1号議案 昭和51年度会務、決算、会計監査報告及び承認の件

第2号議案 昭和52年度事業計画(案)承認の件

第3号議案 会則変更の件(会費値上げ等)

第4号議案 慶弔基金積立の件

第5号議案 昭和52年度会計予算(案)承認の件

第6号議案 昭和52年度役員改選の件

その他

- 6) 閉会のことば

4, 第演 PM 3:30～

「長野県における古式土器の成立」

講師 花園 弘

5, スライド大会 PM 4:30～

「後沢遺跡」 調査主任 林 幸彦

6, 懇親会 PM 5:00～

会費約1,500円

( 当日車は御遠慮下さい )

## ( 第 1 号 講 案 資 料 )

## XXXXXX 昭和 51 年度 佐久 考古 学会 会 務 報 告 XXXXXXXXX

- 851年6月13日 佐久市岩村田旧石器事務所にて総会及び県考古学会事務局長 滝崎 稔  
講師による記念講演「長野県における旧石器」を行なう。( 53名 )
- 852年1月29日 佐久市岩村田模擬会館にて役員会を行なう。( 10名 )
- 852年2月 1日 佐久考古通信第5発刊
- 852年2月20日 佐久市岩村田模擬会館にて、第1回学習会を、藤沢 平治、高村 博文  
の両氏の指導のもとに行なう。( 15名 )
- 852年3月20日 佐久考古通信第6発刊  
佐久市小宮山後武道館での現地学習会と野沢会館にて、藤沢 平治氏の  
指導のもとに「縄文式土器の文様を中心として」の学習会を行なう。  
( 20名 )
- 852年5月25日 佐久考古通信第7の発刊
- 852年8月20日 佐久市岩村田模擬会館にて役員会を行なう。( 10名 )  
・役員改選の件  
・昭和 52 年度総会の件
- 852年8月22日 佐久市野沢会館にて役員会を行なう。
- 852年8月25日 佐久考古通信第8の発刊
- 852年9月 1日 「佐久考古」第3号の発刊

以上、日付順でられつした事業を項目別に統合すると、

1. 総 会 1 回
2. 記念講演会 1 回
3. 学習会 2 回
4. 通 報 ( 第 5 ~ 8 ) 4 回
5. 会 報 第3号の発刊
6. 役員会 3 回

となり、当初の予定とは異ったが、かなりの事業を行なった。

## 昭和 51 年度会計決算報告

## 収入の部

| 項 目     |          | 本年度予算額  | 本年度決算額 | 比 較     | 説 明     |
|---------|----------|---------|--------|---------|---------|
| 1 稽 入 金 | 1) 稽 入 金 | 28,160  | 28,160 | 0       | 前年既より   |
| 2 会 費   | 1) 会 費   | 65,500  | 47,500 | △18,000 |         |
| 3 委 托 料 | 1) 委 托 料 | 0       | 0      | 0       |         |
| 4 学 会 費 | 1) 学 会 費 | 35,000  | 1,200  | △33,800 | 会報6冊売上  |
|         | 1) 補 助 金 | 0       | 0      | 0       |         |
| 5 寄 附 金 | 2) 寄 附 金 | 0       | 20,000 | 20,000  | 寄附金、広告料 |
| 6 稽 入   | 1) 稽 入   | 340     | 0      | △ 340   |         |
| 合 计     |          | 129,000 | 96,860 | △32,140 |         |

## 支 出 の 部

| 項 目       |          | 本年度予算額  | 本年度決算額 | 比 較     | 説 明       |
|-----------|----------|---------|--------|---------|-----------|
| 1 報 酬     | 1) 講 師 費 | 15,000  | 5,000  | 10,000  | 講演会講師謝金   |
| 2 旅 明 費   | 1) 度 曜 費 | 10,000  | 0      | 10,000  |           |
|           | 1) 一般旅費  | 0       | 0      | 0       |           |
| 3 旅 費     | 2) 役員旅費  | 0       | 0      | 0       |           |
|           | 1) 印 刷 費 | 4,000   | 4,690  | △ 690   | 通信及び会報印刷代 |
| 4 消 費 費   | 2) 消耗品費  | 20,000  | 1,700  | 18,300  | 封筒代等      |
|           | 3) 食 料 費 | 10,000  | 6,580  | 3,420   | 会議会食補助    |
| 5 役 務 費   | 1) 通 信 費 | 20,000  | 19,990 | 10      | 切手代       |
| 6 傷 品 費   | 1) 傷品購入費 | 0       | 0      | 0       |           |
| 7 事 務 局 費 | 1) 事務局費  | 10,000  | 0      | 10,000  |           |
| 8 予 備 費   | 1) 予 備 費 | 4,000   | 3,500  | 500     | 来年会費等     |
| 9 繰 越 金   | 1) 繰 越 金 | 0       | 13,390 | △13,390 | 次年既へ      |
| 合 计       |          | 129,000 | 96,860 | 32,140  |           |

## (第2号議案資料)

## 昭和52年度事業計画(案)

1. 講　会　9月10日(土)
2. 例　会　月1回(第2土曜日 PM 2:00頃~)
3. 講　演　会　テーマ「佐久平の遺跡の分布について」  
サブタイトルについては話し合の中で決定
4. 講　演　会　9月10日(土)
5. 見　学　旅行　(年1回の予定)実費
6. 役員会　陸賀(4回)
7. 会報の発行　年1回
8. 通報の発行　年4回

## (第3号議案資料)

## (会費値上げの件)

第5条 本会の運営の経費は次のように定める。

1. 会　費　ア 個人会員　年額 1,000円  
　　イ 団体会員　年額 1,000円  
　　(ただし中、高校生については 500円)
- 一を「1. 会　費　ア 個人会員　年額 1,500円  
　　イ 団体会員　年額 1,500円  
　　(ただし中、高校生については 1,000円)」  
と改める。

## (事務局幹事について)

第6条 第3項会長、副会長、事務局長、委員、会計監査の選出は「～」とする。又事務局幹事は事務局長が選ぶものとする。――を「～」とする。又事務局幹事は、役員会の承認を得て、事務局長が任命するものとする。」と改める。

## ( 第 5 号 諸案資料 )

## 昭和 52 年度会計予算(案)

| 収入の部          |        |        |         |            | 単位 円 |
|---------------|--------|--------|---------|------------|------|
| 項 目           | 本年度予算額 | 前年度決算額 | 比 敗     | 説 明        |      |
| 1 繙入金 1) 繙入金  | 3,390  | 28,160 | △24,770 | 前年度より      |      |
| 2 会費 1) 会費    | 66,000 | 47,500 | 18,500  | 44人×1,500円 |      |
| 3 諸託料 1) 諸託料  | 0      | 0      | 0       |            |      |
| 4 会報発行金 1) 会報 | 10,000 | 1,200  | 8,800   | 200円×50冊   |      |
| 5 寄附金 1) 捐助金  | 0      | 0      | 0       |            |      |
|               | 2) 寄附金 | 0      | 20,000  | △20,000    |      |
| 6 雑入 1) 雑入    | 610    | 0      | 610     |            |      |
| 合 計           | 80,000 | 96,860 | △16,860 |            |      |

| 支出の部           |         |        |         |             |      |
|----------------|---------|--------|---------|-------------|------|
| 項 目            | 本年度予算額  | 前年度決算額 | 比 敗     | 説 明         |      |
| 1 薬師料 1) 薬師料   | 5,000   | 5,000  | 0       | 薬師贈金        |      |
| 2 旅費 1) 一般旅費   | 0       | 0      | 0       |             |      |
|                | 2) 役員旅費 | 0      | 0       | 0           |      |
| 3 印刷費 1) 印刷費   | 46,000  | 46,900 | △ 900   | 通信4回考古1回印刷費 |      |
|                | 2) 消耗品費 | 5,000  | 1,700   | 3,300       | 文具他  |
|                | 3) 食料費  | 5,000  | 6,380   | △1,380      | 会議賃等 |
| 4 役務費 1) 通労費   | 15,000  | 19,990 | △4,990  | 郵送代等        |      |
| 5 備品費 1) 備品購入費 | 0       | 0      | 0       |             |      |
| 6 事務局費 1) 事務局費 | 4,000   | 0      | 4,000   | 車借上、行動費等    |      |
| 7 予備費 1) 予備費   | 0       | 3,500  | △3,500  |             |      |
| 8 繙越金 1) 繙越金   | 0       | 13,390 | △13,390 |             |      |
| 合 計            | 80,000  | 96,860 | △16,860 |             |      |

佐久考古遺物店

発行所 佐久市大学松村山中町 1040-7

佐久考古学会事務局 水内 雄

TEL 02676(8)0617

発行者 由井 英也

担当者 高村 博文・林 常彦

花岡 弘・高畠 恵子

- 一、あいさつにかえて
  - 二、学会の動向
  - 三、柴考古学会「埋文白書」について
  - 四、本会顧問・元副会長 与良清先生をいたむ
  - 五、与良清先生追憶号の原稿募集
  - 六、「南・北佐久郡の考古学的調査」復刊のお知らせ
  - 七、新役員の紹介
  - 八、第二回例会の予告—赤い土器を追おう!!
  - 九、新入会員紹介
  - 十、サボテンの花
- 十一、編集後記

佐久考古通報

版 9

1978, 1, 31

佐久考古学会



## あいさつにかえて

会長 由井茂也

例会に欠席された会員のみなさんには、改めてご挨拶をします。新年おめでとうござります。

ことしもまた早々から発掘や発見や破壊の報道がにぎやかにされています。研究者にとてはこれらのもとを追いかけるだけでも忙しいことです。また佐久地方だけでも発掘や研究調査が實解けを得ていっぱいだと思います。どうか元気に頑張ってもらいたいと思います。

ところで大変なお願いをしたわけですが、県考古学会の埋蔵文化財白書の作成で、今度は具体的に取り組むことになり、佐久関係は佐久考古学会員全員の分担で作成することに決定しました。ほんとにお寒い時季、またお忙しい所大変なことではあります、是非とも御協力願います。

今度の企画を協議していく、今更のように

ます。しかしこの調査の完遂によつて、佐久考古学会が地域の全域にわたつて活動できるのだと思ふと、またこないすばらしい機会だと考えます。

例会には必ず出席され不明の点など充分打合せ完成を期するように地情を借りて重ねておねがいし挨拶にかえます。

## 学 会 の 動 向

○ 昭和五十二年九月十日

佐久市野沢、野沢会館にて総会が二十二名の参加者をもつて開かれる。

会長挨拶のあと、第一号議案「第六号議案」の議事に入り、充分討議を行ない、ほぼ原案どおり通過される。

林幸彦会員による「後沢遺跡」のスライドを見たあと、花岡弘講師による「長野県における古式土師器の成立」の講演が行なわれ、

特に、東海地方及び兩信地方の古式土師器のスライド等をお見させて説明していただき、

日頃佐久地方の土器にしか接する機会を持たない会員にとって、心地良くなつたようだと思

われる。

総会、スライド大会、講演会を終了後、近くの食堂にて懇親会を行ない、公員相互の旧交をもたらめあつた。

○ 昭和五十二年十一月十日

佐久市岩村田にて、第一回役員会を十名の参加者をもつて開かれる。九月十日に改正された会則第六条第三項により、事務局幹事を選出し、それそれの役割担当は事務局会で考えることを決める。又、第一回例会を一月十四日(土)に行なうことを決定する。

○ 昭和五十三年一月十四日

佐久市岩村田浅間会館にて第一回例会は、二十三名の参加者をもつて開かれる。例会のテーマである「佐久平の遺跡分布について」の取扱い方にについて話し合いを行ない、最初生時代に時期をしづらつて活動することを決め、サブタイトル名は、佐久平の後期勞生時代の特徴的土器である赤色塗装の土器をシボル化し、「赤い土器を追おう！」と決定する。

又、県考古学会で実施している「埋蔵文化財白書の件を本例会で取り組むことを決

昭和五十三年一月三十日

○ 昭和五十三年一月二十日  
佐久市岩村にて第一回事務局会を、十二月十日の役員会で承認された幹事及び事務局長の六名が集まり、役割り分担及び例会の「赤い土器を追おう！」の取り組み方について話し合う。

## 県考古学会

## 「埋文白書」について

佐古通信

(3)

第一回例会の冒頭に公長さんから提案され、この例会に取り入れ、会員全員の参加をもつて白書を作成したい考えを述べられた。しかし様式、内容等について県考古学会との連絡がスムーズにとれていたため、その対策をどのようにしたらよいかと話し合っていたところ、ちょうどよいタイミングで、県考古学会事務局長である森藤松氏をはじめ川上元氏、森山公氏の三氏が訪れ、道筋分布図、記入用紙等を持参され、記入方法等について説明があり、どのように対処したらよいかがわかった。そこで会長からの提案について参加者全員で話し合いを行ない、この例会で取り組むことに全員一致の賛成を得た。尚、提出期限

が二月下旬までの切迫した期間のため、各地区の担当責任者を出席者中心として左記のように割当て実施することになった。

尚、尚会員のみなさんも各地区担当責任者と連絡をとって協力を願います。

① 地区別担当責任者  
○ 磐井沢町

○ 津代出町

○ 茂科村

○ 小諸市

○ 佐久市

○ 白山町

○ 佐久町

○ 北相木村

○ 八千穂村

○ 小海町

○ 佐久町

○ 川上村

○ 南牧村  
○ 菊池  
○ 民雄・林  
○ 幸喜

本会顧問・元副会長  
与良 清先生をいたむ

与良先生は、一月十五日午前四時四十八分心臓発作のため、小海病院で亡くなられた。七十歳。

田舎野次中学校卒業後、教職にあるかたわら、研究及び講習活動をされ、現年、小高市

② 中間報告  
二月十八日(土)第二回例会にて行なう。

③ 提出期限  
二月末日

④ 提出場所  
佐久市岩村田住吉町一〇四〇の七  
佐久市考古事務局 木内 健

武藤 金・井上行雄・佐藤 敏  
森原定勝・青木幸男・高付博文  
財穴南高枝郷土史班

黒岩 忠雄・三石 雄雄  
新澤 開三  
井出 正義

由井 茂也・由井 明

由井 茂也

文化財審議委員長・小諸市志納義士任・東信・史字会副会長・塙茂山・山縣保善対策協議会長等の要職にたずさわってきた。

先生は、温厚、学識広く、その人格を以つて、後輩、公職の指導、育成に努め、文化財保護の上でも大きかった。

「信濃史料」編纂に従事、さらには「北佐久郡志」四冊の刊行等の本業がある。県考古学公の創立にもつとめられた。

萬葉の調査では、牧坂、ことに小諸市郷土運動の寺跡調査を実施し、敷石住居址の保存施設等、先生の文化財保護への指導は大きかつた。

先生は、考古、史字ばかりでなく、広い分野より人間性の生活史の追求につとめられて、又、県文化財保護指導委員としても、バトルを経験された。

特に昭和五十年度より、小諸市、軽井沢町、御代田町の文化財審議会合間にによる、浅間山・高山三森保育対策を提唱し、さらに焼焼を越えて、群馬県側御代田町と、高山植物やカモシカも対象にバトロールの実施及保護推進の手立てを実現させた。

特記して、この功績を讃美した。



土 庫 長 久

げる。

○ 小諸市西古墳群（昭四十七年）  
○ 神代山下原古墳群（昭四十九年）  
○ 小諸市神代山下原下條沢敷石住居址  
(昭五十年)

主要編著書には「北佐久郡志」「小諸市誌」「第一巻考古篇」「与良区誌」「川邊村誌」等、万葉の文化財、その他論文多数。

○ 佐久市前出原古墳群（昭四十七年）  
○ 神代山下原古墳群（昭四十九年）  
○ 小諸市神代山下原下條沢敷石住居址  
(昭五十年)

今年度の予会の趣旨白書にも地域協力が必要であり、今後私連会員及び先生方で推進しなくてはならないと思われる。

近年の遺跡発掘調査は、

○ 佐久市岩出山古墳群（昭四十九年）  
○ 神代山下原古墳群（昭四十九年）  
○ 小諸市神代山下原下條沢敷石住居址  
(昭五十年)

○ 佐久市前出原古墳群（昭四十七年）  
○ 神代山下原古墳群（昭四十九年）  
○ 小諸市神代山下原下條沢敷石住居址  
(昭五十年)

○ 佐久市前出原古墳群（昭四十七年）  
○ 神代山下原古墳群（昭四十九年）  
○ 小諸市神代山下原下條沢敷石住居址  
(昭五十年)

## 「南・北佐久郡の考古学的調査」復刊のお知らせ

昭和九年に刊行され、八編一巻著者の、「南北佐久郡の考古学的調査」がこのたび復刊されました。

定価は、「南北佐久郡の考古学的調査」が六五〇〇円、「北佐久郡の考古学的調査」が七八〇〇円です。佐久市古文書室にて一括して購入することができます。

## 与良 清先生追悼号

の 原 福 審 集

昭和53年1月31日

入しますと、割引されますので事務局で取り扱う事にしました。

申込みは、(02676-8-0617)  
木内 捷郎 様周長までお問い合わせ下さい。

新役員の紹介

| 昭和53年1月31日        |                     |
|-------------------|---------------------|
| 会長                | 由井 茂也               |
| 副会長               | 村部 康平               |
| 町政訪電              | 黒岩 忠雄               |
| 市長部               | 鶴 篤                 |
| ○地区委員会            | 久久地区(疊井沢町・御代田町・小諸市) |
| ○地区(北御牧村・立科町・後科村) | 上屋 実                |
| 福庭 春男             | 十三八四〇二二三月町片倉        |
| 地区(佐久市)           | 武藤 金子               |
| 地 務               | (02676-2-5178)      |

|    |                                                                 |
|----|-----------------------------------------------------------------|
| 会報 | 定馬 丁三八五佐久市岩村田荒宿<br>電(02676)七-四七七七                               |
| 会報 | 佐藤 敏子三八五佐久市岩村田相生町<br>電(02676)七-一〇七五                             |
| 会報 | 西垣区(白出町・佐久町・小海町)<br>三石 雄雄 三八四〇六白山町入沢<br>電(02678)四-一〇一           |
| 会報 | 西垣区(北相木村・南相木村・南牧村・川上<br>村)<br>土屋 忠芳 三八四一三南牧村野辺山<br>電(02679)三三九二 |
| 会報 | 由井 明 三八四一四川上村御所平<br>電(02679)七-一〇七六                              |
| 会報 | 西垣区(その他の)<br>日田 武正 十三九九八六北安曇郡池田<br>町二五四〇                        |
| 会報 | 前原 豊 三三七一〇二群馬県多摩郡<br>宮城村馬場四六の二<br>電(02676)二-一〇三九                |
| 会報 | 鈴木 幸男 三八五佐久市岩村田<br>電(02676)八-〇六一七                               |
| 会報 | 林 幸彦・花崎 弘<br>電(02676)八-〇六一七                                     |

|    |                                                                      |
|----|----------------------------------------------------------------------|
| 会計 | 高村 博文 三八五佐久市高村<br>電(02676)五-五〇二九                                     |
| 会計 | 田 一九五〇浅間町内<br>電(02676)五-一五六二                                         |
| 会計 | 町東馬鹿 電(02679)二-三一七一<br>公報 土屋 長久 三八四〇五疊井<br>町長倉三〇三三<br>電(02674)五-五〇二九 |
| 会計 | 公報 青木 幸男 三八九疊井沢町星<br>野屋温泉ホテル<br>電(02674)五-五二二一                       |
| 会計 | 通信 林 幸彦 三八五佐久市岩村田<br>電(02676)七-一五六二                                  |
| 会計 | 通信 花岡 弘 三八四小諸市六供<br>電(02672)二-一-二八六                                  |
| 会計 | 通信 岩田 恵子 三八四〇六佐久<br>町羽鳥下 電(02678)三-一四三<br>庶務 高村 博文・青木 幸男             |
| 会計 | 幸彦・花崎 弘                                                              |



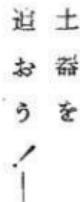
## 第二回例会の予告

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

### サボテンの花

#### 赤い土器を追おう！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊



日時 二月十八日（土）AM2:00

場所 茂山会館

内容 ①「堀文白書」の中間報告

②「赤い土器を追おう！」の具体的検討

その他

竹内 きみ子

佐久考古通情第9号から六ヶ月ぶりといたる発行です。会員

会員やつと通情の係が決定したという事務もあ

つて、いつも通り通情をお読みいたします。

昨年に引き続き、林、花岡、島田の三名が

担当致しますので、よろしくお願ひ申し上げ

ます。

梅雨の合間に青い空  
いつにもまして青く澄み切つて見えるのは  
どうしてかしら？  
久し振りの太陽の下の恩を吸い込んだら  
お陽様のニオイがしました

何気なく横を向いた私の目に飛び込んだのはオレンジの花

（咲いたのね サボテンの花が……）

穂波の砂浜に咲くサボテンの花は

人々の心を慰めるという

ギラギラした太陽の下の人々は もののわ

ぬ花から何を感じるのでしょうか？

失してしまった頃く砂漠の向こうの オアシ

スでどうか？

きっとそんなことを考えている間に 日

サボテンの花……

○ 枝原 浩一 丁三七一 市川市国分五丁  
(学生会長)

○ 江川 美生 子三八五 佐久市上平尾一

自分を見つめる 21

### 佐久考古通情第9号

発行所：佐久市大字岩村出104007

佐久考古学会事務局 木内 健

TEL(02676)8-0617

宛行者：由井茂也

組案者：林志彦 花岡弘

島田恵子

### 編集後記

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

# 佐久考古通信

一 長野県考古学会総務委員会報告

二 ベトロール日誌(1)

三 上桜井北遺跡発掘に参加して

四 佐久平の土器 —その概観—

五 編集後記

No. 10  
1978, 3, 31

佐久考古学会



ゆきわりそり

長野県考古学会  
総代員会報告

県教委の見解に対する質疑、討論。

ことになつております。以上 黒岩

黒岩

報告

阿久遠跡保存に対する学会の意見統一と  
今後の保存方針。

バトロール日誌(1)  
土屋長久

昭和五三年二月十九日、委員・幹事・運営

委・阿久遠跡保存対策委・事務局の懇親会終了後

役員会が開催され下記事項が話

し合われました。佐久地区の出席者は、由井、

井出、渡辺、黒岩の四名。

1. 阿久遠跡保存運動の経過報告

○五二年度に於ける運動は信濃古文44号

郵照、阿久遠跡第1号2月8日完成。

○署名・カンパについて 合55年2月現地

署名 二六四〇〇人

カンパ 金二八五〇〇〇

御協力に感謝します。

現在金一一二〇〇〇〇——赤字未カンパ

の会員のご協力を頼みます。

○抗議行動について

二月十四日、県教委に抗議文を手渡す。

二月十七日、道路公團に対し、二六四〇〇人の署名と抗議文を手渡す。

二月十七日、文化庁に、二六四〇〇人の

同様文書を手渡す旨報告する

ことに決定。

事務局移転について

事務局移転について

会計について

会費未納者が多い。困る。

③「中部高地の考古学」について  
現在編集中、四月二十日に発刊予定。

④第3回森栄賞選考について

選考カード選考中。

及び、今は中山道歴史の遺跡調査と、地教委と  
いう、地域全体の文化財保護は、住民の理解  
と協力なしではとうていできない。諸々、そ  
の立場や、不幸にして該事件で、協力性

はさておき、よく、行政批判を行ひ人を、新聞  
上に散見する。開拓と保護という複雑、

且つ、その追跡地点で、すでに歴史が移つて  
いる時代の急変の処置に、いかにして対応す  
るかといふ、チクニックである。

むかし、朝廷の承認制の施行等の土木工事

ですら、当時の墓（古墳）を移転したり、破壊した史実。又他の氏族の古墳地の上に、巨大な石で構築したあの石舞台、行政という力の強さを知る。

## 2

遺跡調査も、その方法や扱い方が、年々、新しい方法で報告され細分されてゆくが、開発に伴う調査は、緊急の記録保存という前提に立つての行政調査であり、そこに、学術的に調査（費用と日数）を計画しても、他方にあつては、きわめて厳しい壁がある。ある意味では行政の流れに任し、研究面への追求が我々の最終的な任務であるといふべき。それは仕事が一級障害を経た後でも充分可能である。

二月六日、某新聞社から通報があり、同時に、越井沢町教委文化担当から、開発地域の調査を依頼された。越井沢町先進地図である。この事で、以後入山時調査の国学院大学の周辺調査等もあつた。

発地地方は、湿地性の高原地帯でもあり、かつて発地千軒と称した、七寺八堂の伝承もあり、河川の氾濫で流失したという。

さて問題の丘であるが、地主の話によれば、ごく最近までの馬捨場といわれ、約三分の一

が平されていた。土に交って、新しい馬骨片散ヶが出土していた。

付近は、女街道の通過地点であり、馬頭觀音からの石造文化財群が多い。この種約五十五、高さ約五寸の自然丘を利用し、石造物が多くあれば、民俗学上の調査対象にもなり得る。

県では石造文化財は、民俗学の中に入つてゐる。民俗学方面へ方法として先端が加われば、民俗考古学である。やがていくばくもな

い、年代には具体化もある。

埋文バトロールを通じ、文化財保護全般へ

のベトロールが必要であろう。ごく最近できかくして、越井沢町教委と地主、大者間の現場視察、協議は「今、遺構の判断は、作業している一般の人でも判り、遺物がザクザク抜出した折には、可教委の行政指導にそろと

某新聞記者に、古墳とか、假想図の可能性はうすい旨伝えたが、何を思つたか、次の日

の真栄寺の報道であつた。

一月二十六日の防火デーの視察バトロール

の結果、具體化した件を、すでに真栄寺へ報告やら、依頼した直後であり、防ぐよしもな

し。ともあれ、近世寺領数万石の大名格の寺院で、我々でも、山門からはじめたに入れな

い。謹訪観立科山、小沼池と結ぶ、ダイナミックな甲賀三郎伝説もあり、きわめて、重要な文化財であることは周知の通りである。

昭和四八年、県文化財係長の金井先生が視察し、三重の塔は数少く、すべて世界指定と

して、その候補文化財となつてゐる由、をお聞して安心したが、その後の具體化は、小田井宿跡と同様、地教委まかせの現状である。

一番困ったのは、新聞記事内容に正確性がとほしく、専門用語（消防行政）の扱いが慎重に欠けていたことであつた。

我々が論理することは、取材にあたつては始めに、原稿を用意する調査方式が一番良い。マスコミには気をつけよう。（五三、二、十）

## 上桜井北遺跡

発掘に参加して

## 佐久平の土器

## —その概観—

萩原淳一

花岡弘

大学に入り、考古学同好会に入った。それまでの僕は、考古学、特に発掘ということに興味はあつたが、そういう方面のことは、ぜんぜんしたことがなかつた。

幸にも、夏休みに是非やつてみたかった发掘に参加できたのであった。発掘に關しては何一つ知らなかつたので、一つ一つ覚えていった。たゞあに、すばらしい追憶が自分の頭についている所から出たときは感涙であり、それが何器であるかを聞いた。

初めて住居址を掘り下げる時は、どんなすばらしい遺物が出、どのようになつていつるか期待していた。しかし、日1住居址から

は期待していたが、ほとんど近物は出なかつた。反省として、発掘の前にある程度の知識をもつてからやつた方が、より勉強になつたのではないかと感じた。

昭和四十年を前後して、県内の発掘調査件数は急激な増加を示した。佐久平も例外でない。その大半は、緊急調査と呼ばれる乗りべきものではあるが、その反面、膨大な資料を提供してきるわけである。本稿は、佐久市を中心とした佐久平の土器について一瞥しておきたい。

ここでは、まず、簡単な歴史について述べておきたい。

長野県における土器研究は、昭和二九年の半出土跡の調査に開始されたと言える。その後、県下においては、横原健・岩崎卓也・猪沢治・宮沢恒之の諸氏により、地域的な編年が提出されている。土器研究の最近の動向としては、まず技術論が活発化していること、又、いわゆる小遺跡においての編年がなされていることが挙げられよう。

現在、佐久平の土器の編年は、古い順から「五輪式土器」、「四輪式土器」、「三輪式土器」、「二輪式土器」、「一輪式土器」、「無輪式土器」などと分類される。前半

式土器—萬葉式土器—國式土器といふ名称を一般に使用しているわけである。言うまでもなく、これらの土器型式は、研究の先進地と

いう理由から、南関東の編年をそのまま借用しているわけであり、大まかな点においては共通点は認められるものの、細部を検討した場合、国分式土器においても地域差を認めなければならないであろう。

では、大まかに土器型式と時代区分との対比、更に、佐久平における主な遺跡について述べてみたい。

まず、古墳時代前期の土器型式として五輪式土器がある。この時期は、県下においても古墳の築造が開始された時期である（例えれば、松本市弘法山古墳）。佐久平における該期遺跡は、未だ明確ではないが、佐久市岩村田出土、同・西一里坂、同・野沢街道の諸遺跡から、東海地方西部にアイデンティティをもつて字口彫合付圓形土器類（註1）が出土しており、青年時代後詠来から該期に至る資料も漸次蓄積されつつある。

五輪式土器後半の資料は、佐久市今井西原

期における日字口縁台付彫形土器は、姿を消すが、三孔の小型器は残存している。又、五領式土器の飴形土器（有孔鉢）は、東下でも、茅野市下郷河原遺跡の一例であり、煮沸具としては台付彫形土器が主として機能していたものと考えられる。

佐久平における五領式土器の開始は、4世紀中葉以降ではないかと考えている（註2）。

統く和泉式土器を出土する遺跡は、奈々に増加しつつある。代表的な資料は、佐久市市道越前浜2号住居址、第3号堅穴状遺構出土例がある。これまでの知見では、特に高杯形土器の放が多いこと、飴形土器（单孔鉢）の存在が着目される。又、この時期東夷は続く鬼島工式の呼制において、不確実ではあるが移入須恵器が少数出土する可能性がある。研究の資料は、和泉式土器の範囲でも後半のものと考えている。

古墳時代後期の土器は、鬼島式土器によつて代表される。鬼島式土器は、一般に田平（I式）、段半（II式）と区分されている（註3）。まず、I式は、市道越前浜8号住居址出土資料が、比較的良好なセメントとして認め

られる。又、昨年調査された佐久市後沢遺跡においては、圧倒的に多い。杯形土器は、黒色釉研を施されたものが大半を占め、長脚の寶

形土器も普偏化する。又、出形土器も、長脚

化するものの、一部には残存する。住居址出

土の滑石製品（主に、白玉）も、この時期まで確実に認められる。現時点では、I式の時別をステップとしてこの時期に遺跡数の急激な増加を認めなければならぬであろう。

以上、佐久平の土器について、略述して

きた。紙面にも限りがあり、個々の土器、或いは具体的な点については、概説、報告書等により詳説すれば、詳説である。

なお、高村博文・林幸彦の両氏には、種々の御助言を賜わった。本文をながら謝意を表したい。

最後に、圓分式土器は、前述した鬼島工式土器に劣らず、資料が多い。最近、中・南

土器を中心とした地域において、その細分論が提出されており（註4）、佐久平においてもその可能性はある。又、住居址出土の

機械土器も多く、例えば、佐久市戸坂遺跡で提出されており（註4）、佐久平においてもその可能性はある。又、住居址出土の

註1 大曾根一「S字状口縁土器」 いちのみや考古集 13 昭和42年

1号住居址からは7個体が出土しており、異下でも、一住居址出土点数としては、上位に位置する（註5）。

圓分式土器には、須恵器、灰釉陶器、漆袖陶器が伴出してあり、細分には、この方面からアプローチも可能と思われる。

この時期の住居址は、一般に集落址を構成するが、川上村横尾遺跡のように孤立した住居址として提出されるものがあることは、今後検討されねばならないであろう。

土器は、その底も、瓦器、或いは土師質土器として残存するわけである。

以上、佐久平の土器について、略述して

大參集「弥生式土器から土師器へ  
東海地方西部の場合」名古屋大學  
學文學部研究論集(史學) XIV 昭和43

付表

信誠第25巻第4号 昭和48年

- 5 桐田正蔵「越前・湖宮土器小考」  
4 桐田正蔵「半長時代土器等の編年  
風流—特に長野県中南信地方の住  
居址出土土器を中心として—」  
3 桐田正蔵「昭和48年  
2 石野博信・國川尚功「縦向」昭和  
51年  
1 畠山莊介・大塚初重編「土師式土器  
集成 本編3」昭和48年
- この他、三型式に区分する考え方もある。  
版部致史他『八王子中田遺跡』(資料  
篇) 昭和43年
- この他、三型式に区分する考え方もある。
- 5 桐田正蔵「越前・湖宮土器小考」  
4 桐田正蔵「半長時代土器等の編年  
風流—特に長野県中南信地方の住  
居址出土土器を中心として—」  
3 桐田正蔵「昭和48年  
2 石野博信・國川尚功「縦向」昭和  
51年  
1 畠山莊介・大塚初重編「土師式土器  
集成 本編3」昭和48年

| 層年代 A.D.    | 土器型式    | 時代区分   |
|-------------|---------|--------|
| 300年代       | 五領式土器   | 古墳時代前期 |
| 400年代       | 和泉式土器   | 古墳時代中期 |
| 500年代       | 鬼高I式土器  | 古墳時代後期 |
| 600年代       | 鬼高II式土器 |        |
| 700年代       | 真間式土器   | 奈良時代   |
| 800年代<br>以降 | 国分式土器   | 平安時代   |

(市川市史より 加筆修正  
尚年代は幅を有しており絶対的をものではない)

## 編集後記

佐久考古通信 10  
佐久市大字岩村田1040の7  
佐久考古学会事務局 木内 捷  
TEL (02676) 8-0617  
発行者: 由井茂也  
編集者: 林幸彦 花岡弘  
島田恵子

佐久考古通信 10号をお届け致します。  
春の訪れと共に、既回の例会は始まりました。  
歩き回りましたが、ゞ疲れたゞの速歩が起  
り以外に思いました。さあ、屋外に出て体  
をきたえましょう。  
冬の間、家に閉じこもって各人それぞれ  
が研究をしていた半と推察しています。感  
想への成果をお寄せ下さい。